

天理市文化財調査年報

平成 22 年度

成願寺遺跡（第18次）

ノムギ古墳（第4次）

2012

天理市教育委員会



調査地遠景(北西から)

左：ヒエ塚古墳 右：ノムギ古墳



調査地遠景(垂直)

左：ノムギ古墳 右：ヒエ塚古墳



調査地遠景(垂直)



第1調査区 後方部墳丘裾検出状況(南西から)

例 言

- 1、本書は天理市教育委員会が平成22年度に実施した文化財に関する事業の概要をまとめたものである。
- 2、本市教育委員会はこれまで市内遺跡の発掘調査概要報告書を、個人住宅建設に伴う調査等とそれ以外の調査の2シリーズに分けて下記のとおり刊行してきた。

個人住宅建設に伴う調査等		それ以外の調査	
天理市埋蔵文化財調査概報 森本・窪之庄遺跡(高岸地区)	平成2年3月	天理市埋蔵文化財調査概報 昭和58・59年度	昭和60年3月
天理市埋蔵文化財調査概報 乙木・楡垣遺跡	平成2年3月	天理市埋蔵文化財調査概報 昭和60年度	昭和61年3月
天理市埋蔵文化財調査概要報告 1990年度	平成3年3月	天理市埋蔵文化財調査概報 昭和61・62年度	平成元年3月
天理市埋蔵文化財調査概報 1991年度国庫補助	平成4年3月	天理市埋蔵文化財調査概報 昭和63・平成元年度	平成4年3月
天理市埋蔵文化財調査概報 平成4年度・国庫補助調査	平成5年3月	天理市埋蔵文化財調査概報 平成2・3年度	平成5年3月
天理市埋蔵文化財調査概報 平成5年度・国庫補助調査	平成6年3月	天理市埋蔵文化財調査概報 平成4・5年度	平成8年3月
天理市埋蔵文化財調査概報 平成6年度・国庫補助事業	平成7年3月	天理市埋蔵文化財調査概報 平成6・7年度	平成10年3月
天理市埋蔵文化財調査概報 平成7年度・国庫補助事業	平成8年3月	天理市埋蔵文化財調査概報 平成8・9年度	平成15年3月
天理市埋蔵文化財調査概報 平成8年度・国庫補助調査	平成9年3月	天理市埋蔵文化財調査概報 平成10・11・12年度	平成17年3月
天理市埋蔵文化財調査概報 平成9年度・国庫補助事業	平成10年3月	天理市埋蔵文化財調査概報 平成13・14年度	平成19年12月
天理市埋蔵文化財調査概報 平成10年度・国庫補助調査	平成11年3月	天理市埋蔵文化財調査概報 平成15・16年度	平成21年3月
天理市埋蔵文化財調査概報 平成11年度・国庫補助事業	平成12年3月	天理市埋蔵文化財調査概報 平成17年度	平成22年3月
天理市埋蔵文化財調査概報 平成12年度・国庫補助事業	平成13年3月	天理市埋蔵文化財調査概報 平成18年度	平成23年3月
天理市埋蔵文化財調査概報 平成13年度・国庫補助事業	平成14年3月	※続刊は作成中。	
天理市埋蔵文化財調査概報 平成14・15年度・国庫補助事業	平成17年3月		
天理市埋蔵文化財調査概報 平成16年度・国庫補助調査	平成18年3月		
※平成17年度は対象事業なし。			
天理市文化財調査年報 平成18年度	平成20年3月		
天理市文化財調査年報 平成19年度	平成21年3月		
天理市文化財調査年報 平成20年度	平成22年3月		
天理市文化財調査年報 平成21年度	平成23年3月		
天理市文化財調査年報 平成22年度	本書		

平成18年度以降の個人住宅建設に伴う調査等（範囲確認調査等を含む）については、上記左のシリーズに後続する『天理市文化財調査年報』（本書）に収録している。それ以外の調査については、上記右のシリーズに後続する『天理市埋蔵文化財調査概報』として従来どおり刊行を続けている。このほか、単冊の調査概報や調査報告（第8集まで刊行済）も必要に応じて刊行する予定である。

- 3、本書第2章には、付論として山の辺遺跡調査会 桑原久男氏（天理大学文学部）・小田木治太郎氏（天理大学文学部）・岸田徹氏（同志社大学文化情報学部）より玉稿を賜った。
- 4、遺物整理作業及び本書作成に至るまで下記の方々のご助力を得た。記して謝意を表する。
 飯塚健太・中西宏昌・村下博美（天理大学）、今井和代・後藤愛弓（奈良女子大学大学院）、
 阪原奈都美（奈良大学）、松本吉弘（京都大学大学院）、
 岩井真生、河喜多淑子、鈴木貴子、松本真並 〔所属はいずれも平成22年度当時のもの〕
- 5、本書は天理市教育委員会文化財課 主事 石田大輔が編集した。文責は各担当箇所の末尾に明示した。

目 次

巻頭図版

例 言

目 次

第1章 平成22年度 事業の概要 ----- 1

第2章 平成22年度 個人住宅建設に伴う調査・範囲確認調査の概要 ----- 9

成願寺遺跡（第18次） ----- 石田大輔・今井和代 11

ノムギ古墳（第4次） ----- 石田大輔・今井和代 18

付論 ノムギ古墳前方部南側隣接地における地中レーダ探査

----- 山の辺遺跡調査会 桑原久男・小田木治太郎・岸田 徹 31

図 版

抄 録

第 1 章

平成22年度 事業の概要

I. 埋蔵文化財の調査

1. 埋蔵文化財発掘届・通知

平成22年度に本市教育委員会を経由した、文化財保護法第93条にもとづく埋蔵文化財発掘届および同法第94条にもとづく埋蔵文化財発掘通知の件数は以下のとおりである。

第1表 平成22年度 埋蔵文化財発掘届および発掘通知件数

	埋蔵文化財発掘届 (法第93条)	埋蔵文化財発掘通知 (法第94条)		発掘調査	工事立会	慎重工事	その他	未通知
平成22年度 (2010年度)	92	34	県教委通知	16	92	15	2	1

※県教委通知件数は本市教育委員会の受付日基準でカウントした。

なお、件数には次年度以降に対応するものや県教育委員会が対応するものを含むため下記の調査件数等とは一致しない。

2. 発掘調査

平成22年度は5件の発掘調査をおこなった。本書では**3成願寺遺跡（第18次）**、**4ノムギ古墳（第4次）**について概要報告をおこなう。それ以外の調査については、別途概報を刊行する予定である。

第2表 平成22年度 発掘調査一覧

	名称	住所	調査原因	調査面積	調査期間	担当	概要
1	平等坊・岩室遺跡 第33次	岩室町207-2ほか	住宅(賃貸)	76㎡	平成22. 6. 17 ～ 6. 29	石田	中世末～近世：溝、土坑など 弥生時代：自然流路
2	条里遺跡	田部町200-1ほか	土地区画整理	690㎡	平成22. 11. 8 ～23. 1. 31	北口	自然流路
3	成願寺遺跡 第18次	佐保庄町539-1	住宅(自己用)	40㎡	平成22. 12. 3 ～12. 15	石田	中世：素掘溝・土坑など 古墳時代前期：溝
4	ノムギ古墳 第4次	佐保庄町443	範囲確認調査	78㎡	平成23. 2. 14 ～ 3. 18	石田	弥生時代前期～中期：大溝、土坑、 井戸、流路
5	長寺遺跡 第17次	櫛本町2040-1の一部 ほか	宅地造成	56㎡	平成23. 2. 21 ～ 3. 4	北口	弥生時代中期～後期：溝、土坑 中世：溝

3. 試掘調査

平成22年度は12件の試掘調査をおこなった。概要は以下のとおりである。

第3表 平成22年度 試掘調査一覧

	名称	住所	調査原因	調査面積	調査期間	担当	概要
a	成願寺遺跡	成願寺町294-2、294-3、 295、299	住宅(自己用)	1㎡	平成22. 4. 16	石田	遺構なし
b	11-B-332古墳・11-B-333古墳	萱生町1154	住宅(自己用)	3㎡	平成22. 5. 27	北口	遺構なし
c	前栽遺跡	富堂町232-1、233-5	その他建物	15㎡	平成22. 6. 8	青木 石田	時期不明：自然流路
d	星塚遺跡	二階堂上ノ庄町56-1ほか	住宅(分譲)	20㎡	平成22. 7. 20	北口	遺構なし
e	前栽遺跡	前栽町314-7、314-8	住宅(賃貸)	13㎡	平成22. 10. 13	石田	遺物包含層
f	中町西遺跡	中町214-1の一部	住宅(賃貸)	20㎡	平成22. 10. 20	北口	遺物包含層
g	和爾下神社古墳隣接地	櫛本町2497-1の一部	住宅(賃貸)	10㎡	平成22. 10. 25	青木 石田	近世：溝
h	中町西遺跡	中町297-2ほか	住宅(賃貸)	25㎡	平成22. 10. 28	北口	自然流路
i	柳本遺跡	柳本町2038-1	その他建物	50㎡	平成22. 12. 7	松本 青木	自然流路
j	石上寺跡	小田中町223ほか	その他建物	1㎡	平成23. 1. 7	石田	遺構なし
k	沢遺跡	柳本町881-2の一部ほか	宅地造成	6㎡	平成23. 2. 4	石田	遺構なし
l	内山永久寺跡	柚之内町元内山方、内 馬場町	道路	102㎡	平成23. 2. 2 ～ 2. 7	石田	時期不明：石垣

II. 史跡整備

平成18年度より史跡赤土山古墳整備事業を実施し、平成21年度末をもって整備事業は完了した。平成22年度は、整備事業の完了を記念して史跡赤土山古墳オープニング式典を開催するとともに、整備事業報告書の作成をおこなった。

史跡赤土山古墳オープニング式典

史跡赤土山古墳の整備完了を記念する式典を開催した。

日 程 平成22年 4月14日（水）



史跡赤土山古墳オープニング式典

III. 普及・啓発

1. 埋蔵文化財特別展示

文化財課がおこなっている発掘調査の成果を広く市民に紹介するために、「発掘の現場から一地下に眠る天理の昔々」と題する埋蔵文化財特別展示を平成18年度より実施している。夏季・冬季の年2回開催で、夏季は時代や分野を特集した企画展、冬季は前年度の調査成果速報展をテーマとする。平成22年度は第9回、第10回を開催した。開催にあたっては、今年度より展示スペースを拡大して内容の充実を図った。また、展示内容にあわせて文化財講演会・展示解説を実施した。

平成22年度夏の文化財展（第9回）『大和（おおやまと）の前方後方墳—ノムギ古墳をはじめりとして—』
〔展示〕

全国的にみて古い時期に形成された古墳群として知られ、天理市を代表する前期古墳群である大和古墳群のうち、ノムギ古墳をはじめとする前方後方墳の調査成果を紹介し、あわせて同古墳群出土埴輪を参考資料として展示した。また、市内に所在する国内最大の前方後方墳である西山古墳の出土埴輪についても埋蔵文化財天理教調査団の協力を得て展示をおこなった。



夏の文化財展

展示内容 ノムギ古墳、波多子塚古墳、マバカ西古墳、西殿塚古墳、東殿塚古墳、西山古墳など

期 間 平成22年 8月18日（水）～8月29日（日）

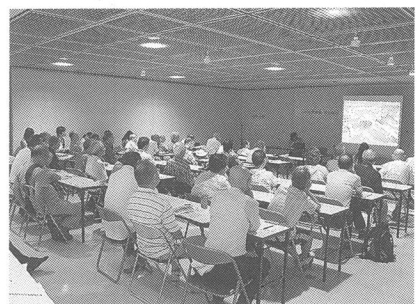
会 場 天理市文化センター1階展示ホール

〔文化財講演会・展示解説〕

日 時 平成22年 8月22日（日） 14:00～16:00

会 場 天理市文化センター1階展示ホール

内 容 「大和（おおやまと）の前方後方墳」（青木勘時）



文化財講演会

平成22年度冬の文化財展（第10回）『平成21年度発掘調査速報展』

〔展示〕

平成21年度中に天理市教育委員会が実施した発掘調査8件の成果を速報展示した。

展示内容 平等坊・岩室遺跡（第31・32次）、小路遺跡（第3次）、ノムギ古墳（第3次）、
条里遺跡（山の辺第1工区土地区画整理事業に伴う調査）、平等坊・岩室北遺跡（第2次）、

成願寺遺跡（第17次）

期 間 平成22年12月15日（水）～12月26日（日）

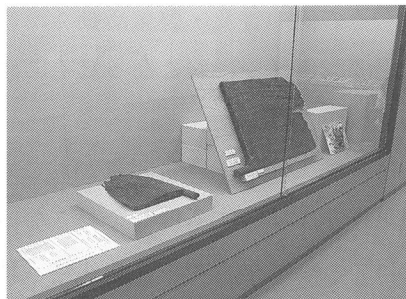
会 場 天理市文化センター1階展示ホール

〔文化財講演会・展示解説〕

日 時 平成22年12月19日（日） 14:00～16:00

会 場 天理市文化センター1階展示ホール

- 内 容 ①「下ツ道遺跡の調査」（北口聡人）
②「小路遺跡第3次調査」（石田大輔）
③「ノムギ古墳の調査」（青木勘時）



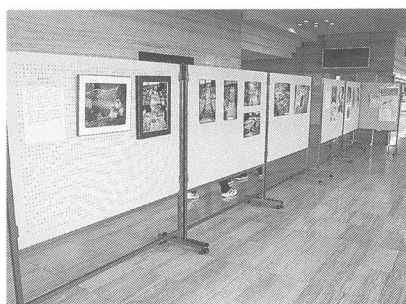
冬の文化財展

2. 市役所写真展示

市文化センターで開催した夏の文化財展にあわせて、市役所1階市民ホールを利用して写真パネル展示をおこなった。

期 間 平成22年8月17日（火）～8月31日（火）

展示内容 大和古墳群における発掘調査の歩み
姉妹都市韓国ソサン市の文化財



市役所写真展示

3. 公開講座

史跡赤土山古墳の整備完了を記念して、赤土山古墳が所在する東大寺山古墳群を形成する大型前方後円墳をテーマとする公開講座を天理市教育委員会主催で開催した。天理参考館が開催した創立80周年記念特別展「よみがえるヤマトの王墓－東大寺山古墳と謎の鉄刀－」に市教育委員会所蔵の赤土山古墳出土埴輪を出陳したのにあわせて、公開講座も同館内を会場としておこなった。

日 時 平成22年11月20日（土） 13:00～15:30

会 場 天理参考館研修室

- 内 容 ①「東大寺山古墳の調査」（山内紀嗣：天理大学附属天理参考館学芸員）
②「赤土山古墳の調査」（松本洋明）
③「和爾下神社古墳と周辺の古墳」（青木勘時）



公開講座

4. 発掘調査現地説明会

大和古墳群基礎調査の一環としておこなったノムギ古墳の発掘調査成果について、現地説明会を開催した。当日は約300名の来場者があった。

日 程 平成23年3月12日（土）



ノムギ古墳発掘調査現地説明会

5. その他の普及・啓発活動

平成22年度中におこなったその他の普及・啓発活動のうち、主なものは以下のとおりである。

黒塚桜まつり

柳本商工連盟・同青年部がおこなう「黒塚桜まつり」の際に、文化財に親しむ機会の一つとして、勾玉作りを体験する催しをおこなった。平成22年春は下記の日程でおこなった。

日 程 平成22年4月4日（日）

天理っ子遺跡探検隊

主に小学生を対象として市内の遺跡や古墳をめぐるハイキングを平成17年度より開催している。本年度は第6回目で、本市樺本町周辺をめぐる。

日 程 平成22年11月27日（土）

行 程 JR樺本駅→和爾下神社古墳→赤土山古墳→高塚遺跡
→白川池→ウワナリ塚古墳→JR樺本駅



遺跡探検隊

6. 刊行図書

平成22年度は下記の図書を新たに刊行した。

・天理市埋蔵文化財センターだより Vol. 10

平成22年8月18日

平成22年度夏の文化財展の展示内容にあわせて、大和古墳群における前方後方墳について、ノムギ古墳の調査成果を中心に紹介した。

・天理市埋蔵文化財センターだより Vol. 11

平成22年12月15日

平成22年度冬の文化財展の展示内容にあわせて、平成21年度中におこなった8件の発掘調査成果を紹介した。

・天理市埋蔵文化財調査概報 平成18年度

平成23年3月31日

以下の調査概要を掲載した。

平等坊・岩室遺跡（第28次・第29次）、成願寺遺跡（第14次）、願興寺跡、合場遺跡（第6次）、
平等坊・岩室北遺跡（第1次）

・天理市文化財調査年報 平成21年度

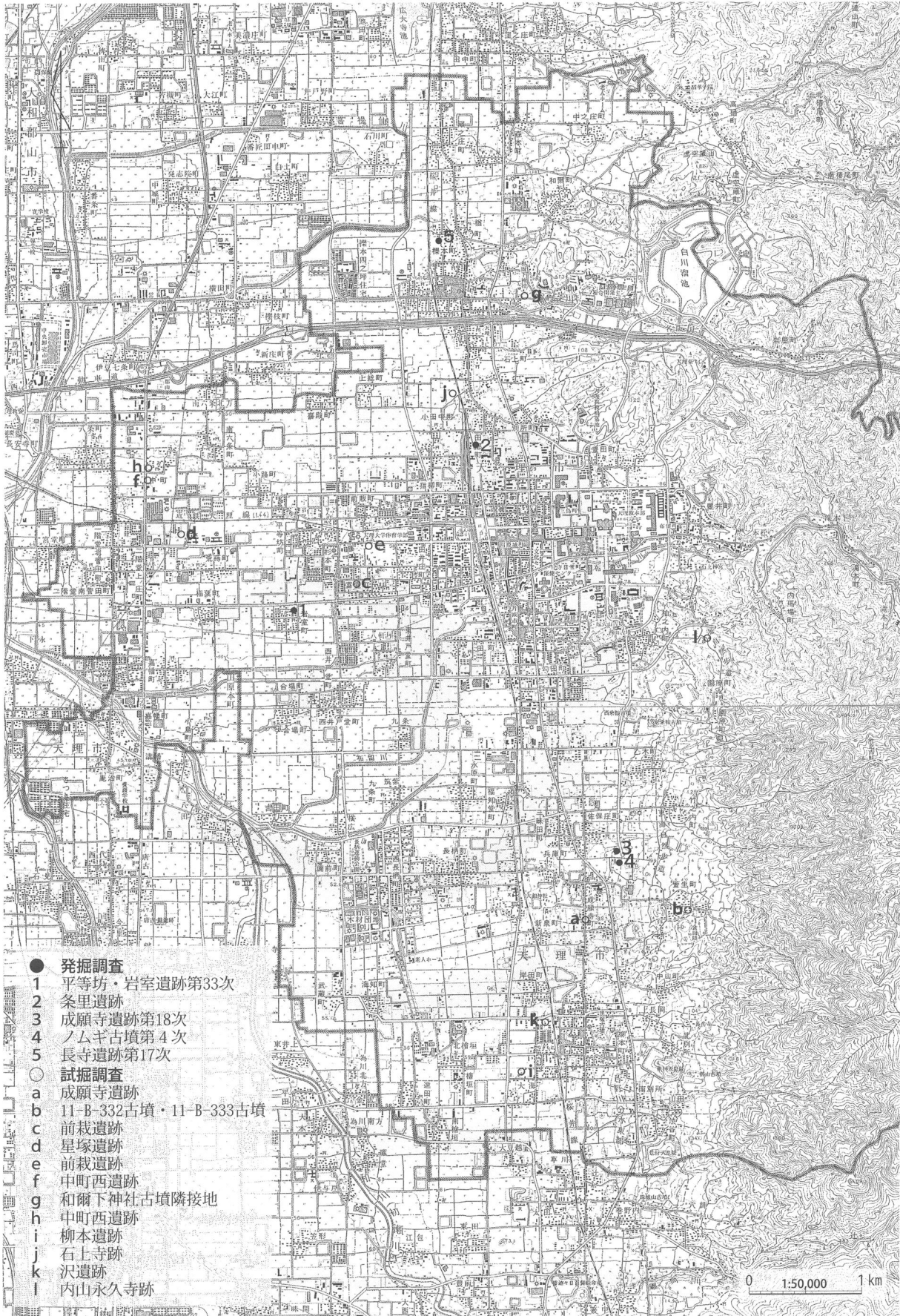
平成23年3月31日

平成21年度の事業内容と、平等坊・岩室遺跡（第32次）、ノムギ古墳（第3次）の調査概要を掲載した。また、資料報告として、平等坊・岩室遺跡で検出された水田状遺構におけるプラントオパール分析結果を掲載した。

・史跡赤土山古墳整備事業報告書

平成23年3月31日

平成21年度末で整備事業が完了した史跡赤土山古墳について、整備事業の概要を報告した。



第1図 平成22年度 発掘調査・試掘調査地点

第 2 章

個人住宅建設に伴う調査・ 範囲確認調査の概要

成願寺遺跡（第18次）

I. はじめに

成願寺遺跡は天理市成願寺町、佐保庄町、兵庫町一帯に展開する遺跡で、弥生～古墳時代にかけての遺物が散布することが知られている。遺跡内には古墳時代前期を中心とする大和古墳群の大半が含まれるとともに、古代の官道である上ツ道が遺跡を南北に縦断している。



第2図 調査地位置図

第4表 成願寺遺跡における調査（天理市教育委員会が実施したもの）

調査回数	旧称	期間	調査原因	面積	調査担当	文献
第1次	成願寺遺跡第1次	昭和58年5月18日～5月26日	朝和幼稚園	200㎡	泉武	泉武1985「成願寺遺跡(第1次)」『天理市埋蔵文化財調査概報』昭和58・59年度 天理市教育委員会
第2次	成願寺遺跡第2次	昭和59年5月7日～5月18日	朝和小学校屋内運動場	100㎡	泉武	泉武1985「成願寺遺跡(第2次)」『天理市埋蔵文化財調査概報』昭和58・59年度 天理市教育委員会
第3-1次	成願寺遺跡第3次	昭和61年6月27日～7月1日	朝和小学校校舎改築	34㎡	泉武	泉武1988「成願寺遺跡(第2次)」『天理市埋蔵文化財調査概報』昭和61・62年度 天理市教育委員会
第3-2次	成願寺遺跡第3次	昭和62年6月17日～6月18日	朝和小学校校舎改築		泉武	〃
第4次	成願寺遺跡(西ノ山地点)	平成2年11月19日～3年1月31日	個人住宅	130㎡	青木勘時	青木勘時1991「西ノ山古墳・成願寺遺跡の調査」『天理市埋蔵文化財調査概報』1990年度 天理市教育委員会
第5次	下池山古墳北側外堤	平成3年1月23日～2月3日	ため池改修		青木勘時	青木勘時1993「下池山古墳北側外堤」『天理市埋蔵文化財調査概報』平成2・3年度 天理市教育委員会
第6次	大和古墳群(クリヤダ地区)	平成3年5月23日～6月7日	個人住宅	200㎡	松本洋明	松本洋明1992「大和古墳群(クリヤダ地区)」『天理市埋蔵文化財調査概報』1991年度国庫補助 天理市教育委員会
第7次	下池山古墳隣接地	平成8年5月14日～6月3日	焼却炉	86㎡	泉武	泉武2003「下池山古墳隣接地(遺物散布地)」『天理市埋蔵文化財調査概報』平成8・9年度 天理市教育委員会
第8次	成願寺遺跡(大和古墳群)	平成9年2月3日～2月7日	個人住宅	80㎡	松本洋明	松本洋明1997「成願寺遺跡(大和古墳群)」『天理市埋蔵文化財調査概報』平成8年度国庫補助調査 天理市教育委員会
第9次	成願寺遺跡	平成13年1月24日	宅地造成	60㎡	泉武	(試掘)
第10次	栗塚古墳隣接地	平成13年2月20日	その他建物	150㎡	泉武	(試掘)
第11次	大和古墳群・成願寺遺跡	平成14年5月20日～6月7日	個人住宅	60㎡	青木勘時	青木勘時2005「大和古墳群・成願寺遺跡の調査」『天理市埋蔵文化財調査概報』平成14・15年度国庫補助事業 天理市教育委員会
第12次	成願寺遺跡	平成15年11月28日～12月16日	ため池改修	174㎡	松本洋明	松本洋明2004「成願寺遺跡-下池の護岸工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要-」『天理市教育委員会』
第13次	成願寺遺跡	平成18年2月6日～2月27日	学童保育所	108㎡	青木勘時 清岡廣子	青木勘時2010「成願寺遺跡(第13次)」『天理市埋蔵文化財調査概報』平成17年度 天理市教育委員会
第14次	成願寺遺跡・ホッキリ塚古墳	平成18年6月12日～7月18日	道路	100㎡	北口聡人	北口聡人2011「成願寺遺跡(第14次)」『天理市埋蔵文化財調査概報』平成18年度 天理市教育委員会
第15次	成願寺遺跡第15次	平成20年3月3日～3月24日	範囲確認	107㎡	北口聡人	北口聡人2009「成願寺遺跡(第15次)」『天理市文化財調査年報』平成19年度 天理市教育委員会
第16次	成願寺遺跡第16次	平成20年3月10日～3月12日	災害復旧	57㎡	青木勘時 石田大輔	
第17次	成願寺遺跡第17次	平成21年9月7日～9月14日	携帯電話アンテナ	36㎡	北口聡人	
第18次	成願寺遺跡第18次	平成22年12月3日～12月15日	個人住宅	40㎡	石田大輔	本書

II. 既往の調査

成願寺遺跡における調査 成願寺遺跡においては、これまで天理市教育委員会と奈良県立橿原考古学研究所により発掘調査が実施されている。縄文時代後期～晩期や弥生時代中期～後期の土器・石器類、古墳時代前期の土器類が出土しているが、現段階では明確な集落関連遺構は検出されていない。これら既往の調査は〔北口2009〕において整理され、このうち天理市教育委員会による調査については回数数の整理がおこなわれたが、あらためて平成22年度までの調査を第4表に示す。調査は現在までに18回を数える。

第18次調査地周辺における既往の調査 今回の第18次調査地は成願寺遺跡の北辺に位置する。調査地の南方約50mの至近距離にノムギ古墳が立地する。



第3図 調査区位置図

成願寺遺跡とその北側に隣接する乙木・佐保庄遺跡では、県道天理環状線関連の調査がこれまでに実施されているが、そのなかでも平成6年度に奈良県立橿原考古学研究所が乙木・佐保庄遺跡2次として実施した調査では、今回の第18次調査地のすぐ東側で試掘第7・8トレンチが設定された（坂・鈴木（編）2007）。この調査区では、古墳時代前期～中世の遺物包含層が確認されたほか、調査地北側の谷に向かって緩やかに下降する自然地形と、東西方向の自然流路（SX01）が検出されている。今回設定した第18次調査区は、橿原考古学研究所が設定した試掘第7トレンチの西方約15mの地点に相当し、もと同筆の畑地にあたる。

また、平成12年度には、今回の調査地の西方約60mの地点において、天理市教育委員会が宅地造成に伴う試掘調査をおこなっている（成願寺遺跡第9次）。この調査では明瞭な遺構は検出されていないが、中世の土器片が出土したことが報告されている。

Ⅲ. 調査の契機と経過

1. 調査の契機

今回の成願寺遺跡第18次調査は、天理市佐保庄町539-1における個人住宅建設にともない実施した事前調査である。調査は平成22年12月3日に開始し、平成22年12月15日に全ての作業を終了した。調査面積は40㎡である。

2. 調査の経過

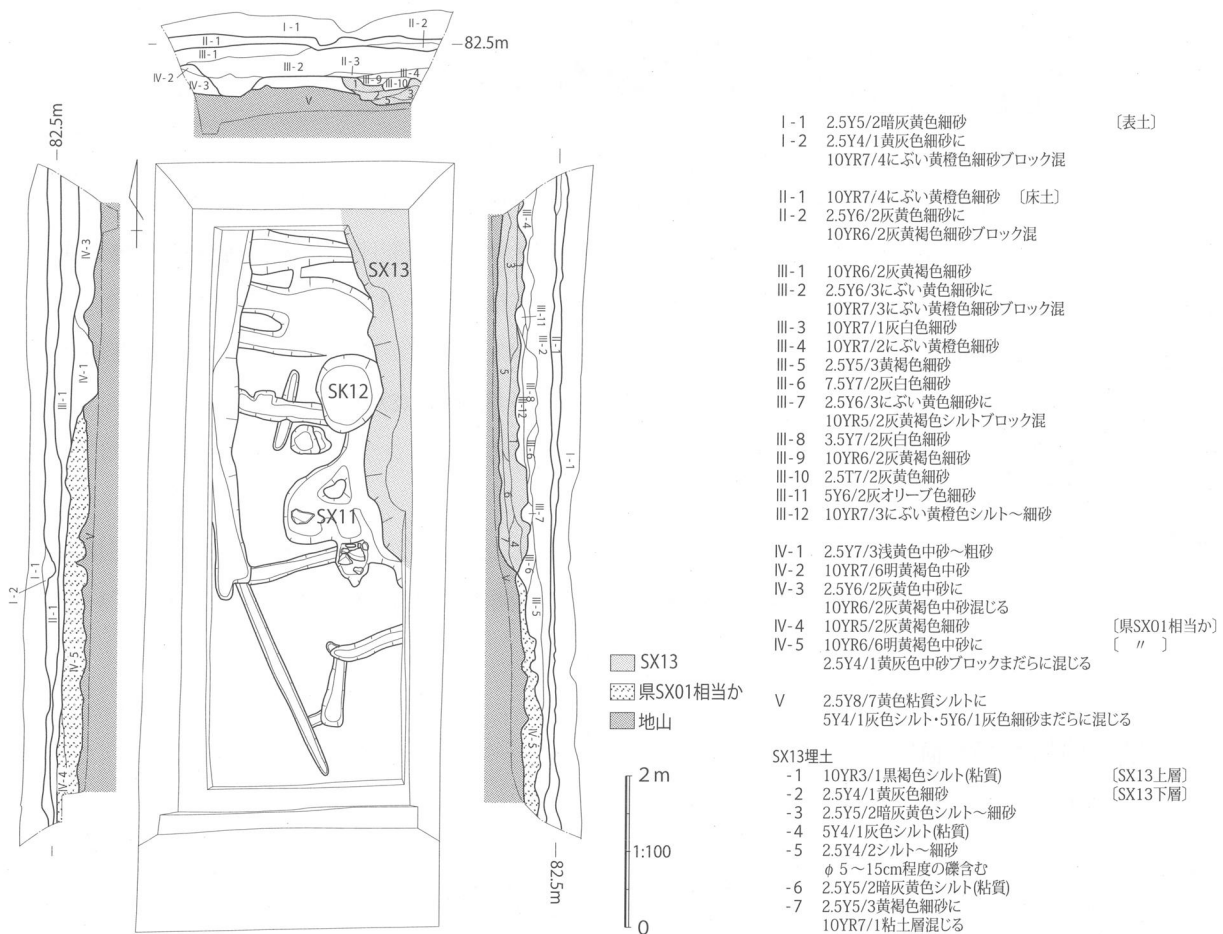
今回の調査地は、現地権者が戦後まもなく旧帝国海軍より払い下げを受けて耕作してきたところで、近年は果樹園として利用されていた。このたび敷地内に個人住宅を建設することが計画されたため、建物予定地の東側に南北10m、東西4mの調査区を設定した。調査に際しては、重機により表土を除去したのち人力掘削に移行したが、調査区南端で見つかった近代の暗渠からの激しい湧水により作業に支障が生じたため、当該箇所を部分的に埋め戻した上で調査を継続した。

IV. 調査の成果

1. 層序

基本的な層序は、上位から**第I層**（表土）、**第II層**（にぶい黄橙～灰黄色細砂層 旧耕土）、**第III層**（灰黄褐～灰白色細砂層 遺物包含層 中世遺物を包含）、**第IV層**（黄褐色細砂層主体 遺物わずかに含む）、**第V層**（黄色粘質シルト層 地山）である。地山（第V層）は調査区の北側が南側より標高がやや低い状況が確認できた。

調査では、第I層、第II層を重機掘削したのち人力掘削に移行した。第IV層上面で遺構検出、掘削をおこない平面図等の記録を作成したのち、第IV層を除去し第V層上面の起伏を確認した。航空写真撮影は第V層上面を検出した段階でおこなった。



※方位表示は任意

第4図 調査区平面図・土層図

2. 遺構

素掘溝群 第IV層上面で素掘溝群を検出した。おもに調査区北半に密に分布する。東西、南北方向の素掘溝群が錯綜するが、全体としては南北方向の素掘溝が相対的に新しい。須恵器、土師器、土釜破片などが少量出土した。

落ち込みSX11 南北約1.5m、東西約1.5m程度の不整形の落ち込みである。拳～人頭大の石材が2箇所から出土した。南側からは複数の石材が集中して出土したものの、石材は大きさが不揃いでしっかりと組み合わせられたものではなかった。埋土はにぶい黄色～灰白色層で第III層と類似する。須恵器、土師器等が少量出土した。

土坑SK12 径2.5m程度の円形の土坑である。埋土はにぶい黄色～灰白色層で第III層と類似する様相である。須恵器、土師器、土釜の破片などが少量出土した。

溝状遺構SX13 第IV層上面で検出した溝あるいは流路状の遺構である。調査区東壁よりで確認した。埋土は上半が黒褐色シルト層、下半が灰色砂層主体で、最下層には拳大の礫を多数含んでいた。埋土からは古墳時代前期の遺物が出土した。

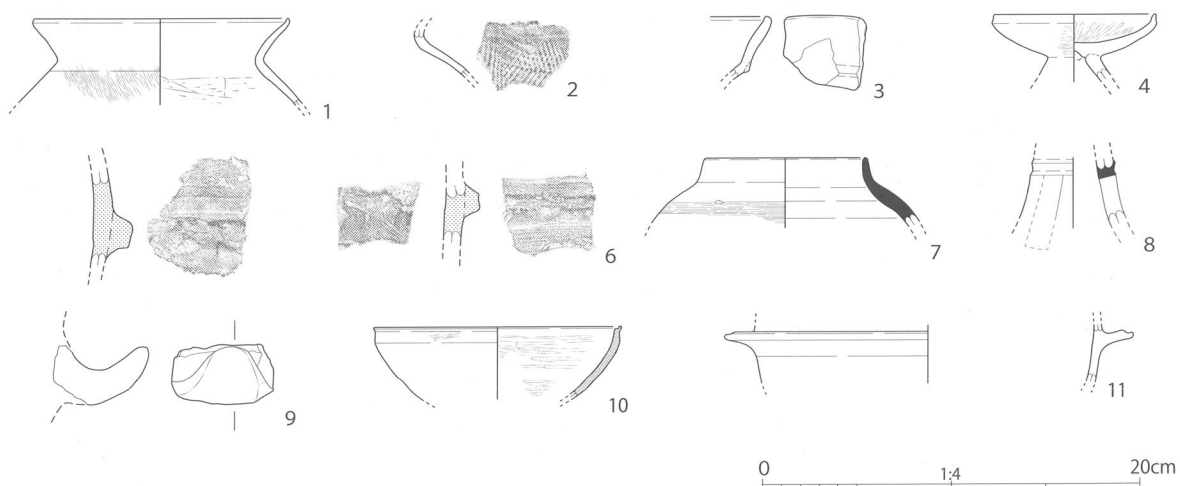
第IV-4・5層 第IV層のうち調査区南半は灰黄褐色～明黄褐色砂層（第IV-4・5層）であった。この砂層堆積は、県調査においてSX01と呼称された流路状堆積と、調査区の位置関係からみて同一の遺構に由来する可能性がある。遺物は出土しなかった。（石田大輔）

3. 出土遺物

今回の調査では、遺物包含層、土坑、不明遺構、素掘溝から古墳時代前期～中世の遺物が得られている。全体的に小破片が多く、出土遺物総数は標準的な遺物箱1箱程度である。

ここでは、図示した遺物について技法、形態等での特徴的な部分に触れつつ概観し、各遺物の色調、胎土、焼成、法量、出土地点等については第5表を参照されたい。

1は外反気味の口縁で端部を摘み上げた形状を呈する。外面はハケ調整で仕上げられ、内面には明瞭なヘラケズリ調整が施され、器壁は薄い。形態的には庄内型甕の特徴を有するが、外面がハケ調整であることから布留式傾向型甕であることがわかる。



第5図 出土遺物実測図

2は外面に矢羽根状タタキ目、内面にはヘラケズリが施された庄内型甕の頸部から胴部にかけての小片である。タタキ目の特徴から庄内大和型甕であることが知られる。

3は有段口縁を有する甕の小片である。金雲母を含む在地産とは異なる胎土、色調や形態的特徴から山陰系であると思われる。

4は中実の小型器台である。受部の外面にはヨコミガキがわずかに残り、内面は放射状のミガキが看取できる。脚裾部を欠くが形態的に典型的な庄内式土器の器台であることが知られる。

5・6は埴輪片である。器面の摩滅、剥落が著しいが、ともに断面台形の突帯が貼付されていることが看取できる。5は、内湾することから朝顔形埴輪片の可能性がある。また6は、外面にはヨコハケが残り、内面ヨコ・ナナメ方向のハケ調整が施されている。焼成は良好で、須恵質である。6世紀代のものと思われる。

7・8は須恵器の小片である。7は短頸壺で、外面にカキ目が看取できる。8は沈線が2条残り長方形の透孔を有することから、長脚高杯の脚部であると考えられる。こうした形状や特徴から概ね6世紀末頃に帰属するものとする。

9は把手部分のみが残る小片である。外上方に延びた舌状の把手を胴部に貼付したことが看取できる。小片であるため全体像は不明であるが、おそらく大型把手付鉢の一部と思われる。

10は瓦器碗の小片である。ヨコナデにより口縁部と体部の境が明瞭に認められ、口縁内端面には沈線が施され段を呈する。摩滅が著しいが内外面共にヨコ方向の暗文ヘラミガキが看取できる。こうした特徴から典型的な大和型瓦器碗であることが知られる。12世紀後半～13世紀初頭に帰属時期を求めることができる。

11は土師質羽釜である。精良な胎土で羽の部分は段を呈する。 (今井和代)

第5表 出土遺物観察表

番号	器種	色調	胎土	焼成	口径/底形 (cm)	器高 (cm)	残存率	出土地点	備考
1	甕	7.5Y6/3にぶい褐	密	良好	13.4	4.6	口縁部1/6	SX13下層	布留傾向型甕
2	甕	10YR6/2灰黄褐	密	良好	-	-	破片	SX13下層	庄内大和型甕
3	甕	7.5Y6/3にぶい褐	密(径1mm以下の白い砂粒、少粒、金雲母を多く含む)	やや良好	-	-	破片	SX13下層	山陰系
4	小型器台	7.5YR6/6橙	密	良好	4.3	3.5	受部約1/2	SX13上層	
5	埴輪片	7.5YR7/4にぶい橙	密	良好	-	-	破片	III層	朝顔形埴輪か
6	埴輪片	外面:10YR7/1灰白 内面:7.5YR7/4にぶい橙	密	良好	-	-	破片	SX11	須恵質
7	須恵器壺	2.5Y6/1黄灰	密	良好	8.4	3.7	口縁～肩部1/8	SK12	
8	須恵器高杯	N5/灰	密	良好	-	3.7	脚柱部1/6	III層	長脚高杯
9	把手付鉢	10YR6/3にぶい黄橙	密	やや軟	-	-	破片	東西素掘溝	
10	瓦器碗	N4/灰	密	良好	13.0	3.9	口縁部1/8	南北素掘溝	
11	土師質羽釜	10YR7/3にぶい黄橙	密	良好	-	3.1	鏝部約1/8	南北素掘溝	外面煤付着

V. まとめ

中世の遺構 検出した遺構のうち、素掘溝群、およびSX11・SK12については、出土遺物が小片に限られるものの土釜破片が少量含まれており、中世段階の遺構と判断した。SX11・SK12は素掘溝群と埋土が類似しており、ほぼ同時期のものと思われる。素掘溝群と同様に耕作に関わる遺構と考えておきたい。

古墳時代前期の遺構 SX13については、調査区東壁よりで検出したため全容が明らかでない。人為的な遺構か自然流路であるかの判断は現段階では保留するが、埋土から古墳時代前期の遺物のみ出土することから、ノムギ古墳など周辺の古墳との関連が注意される。周辺の県調査区でも古墳時代前期の遺物が出土しており、ノムギ古墳北側の谷に向かう緩斜面上には、当該時期の遺構が一定程度分布していることが窺える。

また、県調査で検出された東西方向の流路状堆積（SX01）につづく可能性のある砂層堆積を検出したことについても、今後の機会をまって検証する必要がある。 (石田大輔)

〔参考文献〕

坂靖・鈴木裕明(編)2007『マバカ古墳周辺の調査～県道「天理環状線」建設に伴う発掘調査報告～』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第99冊

ノムギ古墳（第4次）

I. はじめに

天理市教育委員会は大和古墳群の保護を図るうえでの基礎資料を得ることを目的とした「大和古墳群基礎調査」を実施している。その一環として、平成21年度よりノムギ古墳の範囲確認調査に取り組んできた。

II. 既往の調査

大和古墳群

奈良盆地東南部の東山麓沿いには、古墳出現期から前期にかけての大型古墳が多数存在し、南北約5kmにわたって継続的な造墓活動の痕跡が残されている。

大和古墳群は、こうした造墓地帯の最北部に位置し、天理市萱生町、中山町一帯の丘陵上から西方の成願寺町付近にかけての緩斜面上に点在する古墳群を指し、かつて「萱生古墳群」とも呼ばれた一群である。

大和古墳群は、丘陵上の前方後円墳のみで形成される中山支群と、緩斜面上に散在する前方後円墳、前方後方墳、円墳などの萱生支群に区分することができる。

大型前方後円墳を主体とする中山支群では、埴輪の起源となる吉備地方の特殊器台片が発見され出現期の古墳と考えられる中山大塚古墳（河上ほか1996）や特殊器台形埴輪が樹立し当古墳群中で最大規模の前方後円墳となる西殿塚古墳（福尾1989・泉武ほか2000）、それに墳丘裾に特異な埴輪配列をもつ東殿塚古墳（泉・松本・青木2000）などがあり、同じ尾根筋上での累世的な築造が考えられている。

また、中山支群の北西に展開する萱生支群では最古級の大型前方後方墳と考えられるノムギ古墳をはじめ、中山支群で出現した初期埴輪と同系統の埴輪をもつ波多子塚古墳（青木2007）、大型内行花文鏡の副葬例を見た下池山古墳（卜部ほか2008）など盆地東南部前期古墳群のなかでも、この支群にのみ前方後方墳築造の系譜が認められている。

以上のように、大和古墳群は各支群の形成に特色が認められ、古墳の成立過程を知るうえで重要な意義を有している。

ノムギ古墳

ノムギ古墳は、大和古墳群萱生支群に含まれ、同古墳群の北端に位置する全長63mの前方後方墳である。東側に近接するヒエ塚古墳とともに龍王山から西へ延びる尾根筋上に立地する。

奈良県立橿原考古学研究所による調査 ノムギ古墳は、昭和52（1977）年の奈良県立橿原考古学研究所による墳丘測量調査の際には全長63m、後円部径40mの前方後方墳と考えられていた（伊藤1981）。その後平成8（1996）年に古墳北側で実施された発掘調査【第1次調査】において、ほぼ直角に曲がる周濠北東隅部分を検出したことから墳形が前方後方墳となる可能性が高まり、円筒埴輪、鰭付円筒埴輪等の出土により古墳時代前期後半頃とされた（岡林1997）。

平成15（2003）年には墳丘東側で県道天理環状線建設工事に伴う発掘調査【第2次調査】が実施され、周濠外縁及び墳丘の南東隅が検出されたことから（近江（編）2006）、墳形については前方後方墳であることが確定的となった。また、周濠埋土より多量の土器が出土し、ノムギ古墳が古墳時代前期初頭の



第6図 調査地位置図

出現期古墳である可能性が高くなった。

天理市教育委員会による範囲確認調査 県道天理環状線の開通後、現状では史跡指定を受けていないノムギ古墳は開発による改変にさらされる恐れが生じている。そのため、天理市教育委員会は平成21年度よりノムギ古墳の範囲確認調査をおこない、古墳の保護を図るための基礎的情報を収集することにした。なお、天理市教育委員会は平成5（1993）年度より大和古墳群の基礎的情報を得るため

第6表 ノムギ古墳における調査

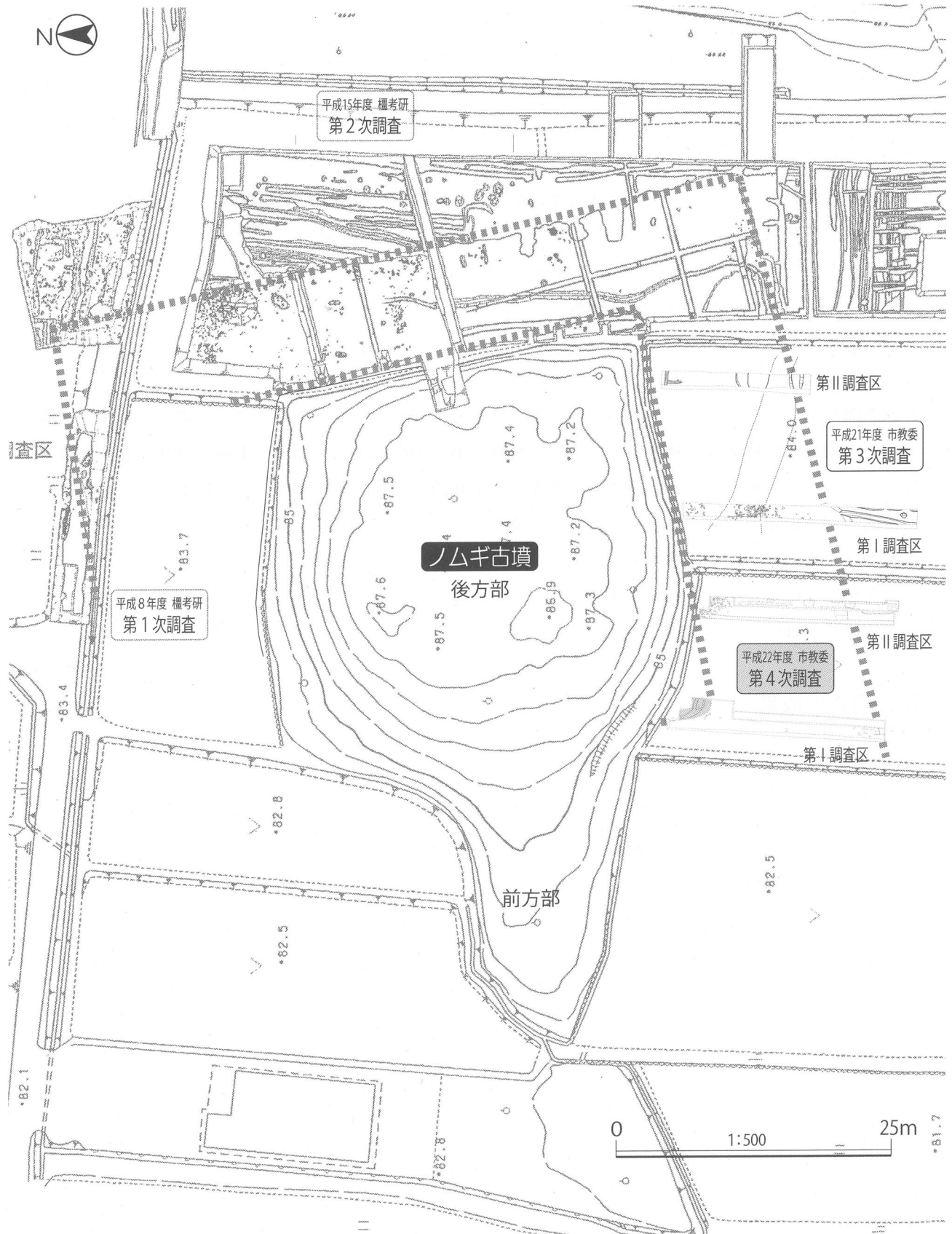
調査回数	調査主体による呼称	期間	調査原因	調査担当	文献
第1次	大和古墳群 (ノムギ古墳隣接地)	平成8年11月19日～ 12月24日	農道改良	榎考研 岡林孝作	岡林孝作 1997「大和古墳群(ノムギ古墳隣接地)」『奈良県遺跡調査概報』1996年度第1分冊 奈良県立橿原考古学研究所
第2次	ノムギ古墳	平成15年4月15日～ 12月10日	県道建設	榎考研 近江俊秀	近江俊秀(編)2006『ノムギ古墳』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第93集 奈良県立橿原考古学研究所
第3次	ノムギ古墳第3次	平成22年2月18日～ 3月25日	範囲確認調査	市教委 青木勘時	青木勘時・今井和代 2011「ノムギ古墳(第3次)」『天理市文化財調査年報』平成21年度 天理市教育委員会
第4次	ノムギ古墳第4次	平成23年2月14日～ 3月18日	範囲確認調査	市教委 石田大輔	本書



第7図 調査区位置図

「大和古墳群基礎調査」をおこない、その過程で西殿塚古墳・東殿塚古墳・波多子塚古墳の範囲確認調査を実施してきた経緯があり、ノムギ古墳の調査もその一環として位置づけている。

天理市教育委員会がノムギ古墳の範囲確認調査としてはじめておこなった第3次調査では、後方部南側の休耕地に南北方向の調査区を2ヶ所設定した(青木・今井2011)。第3次調査では、平成15年度の第2次調査において確認されていた後方部南東側周濠の延長部分が検出され、周濠の平面形態を知る手がかりが得られた。また、調査区内において墳丘から転落したと思われる石群を確認した。それ以前の調査ではノムギ古墳には葺石が存在しないとされていたが、第3次調査により墳丘裾付近にかつて葺石が存在した可能性が指摘されるに至った。



第8図 調査区配置図

Ⅲ. 調査の契機と経過

1. 調査の契機

今回の第4次調査は平成21年度の第3次調査に引き続き、後方部南側の墳丘と周濠の形状を確認することを目的として、第3次調査地の西側隣接地（天理市佐保庄町443）を調査対象とした。当該地は現在も畑として利用されているが、土地所有者の協力を得て墳丘に近い北半部分に調査区を設定することができた。

また発掘調査に先立ち、今回の第4次調査地のさらに西側隣接地における地中レーダ探査を山の辺遺跡調査会（代表 桑原久男氏（天理大学文学部））への委託により実施した。当該地は現在のところ発掘調査を実施できないため、レーダ探査の成果が前方部南側の周濠の形状を知る上で手がかりとなる。成果については本報告の付論として掲載した。

2. 調査の経過

調査開始にあたってはビニールハウスの撤去作業をおこなったのち、南北方向の調査区を2ヶ所設定した。調査区は幅2mを基本とし、当初は西側の第Ⅰ調査区を南北19m、東側の第Ⅱ調査区を南北17mとした。墳丘裾を確認するため第Ⅰ調査区、第Ⅱ調査区とも北側を部分的に拡張したことから、最終的な調査面積は78㎡となった。調査は平成23年2月14日に開始し、平成23年3月18日に全ての作業を終了した。掘削および埋め戻しはすべて人力でおこなった。

調査期間中の3月10日には記者発表をおこない、3月12日には一般向け現地説明会を実施した。現地説明会当日は好天に恵まれ、約300名の見学者があった。

Ⅳ. 調査の成果

1. 第Ⅰ調査区

(1) 層序

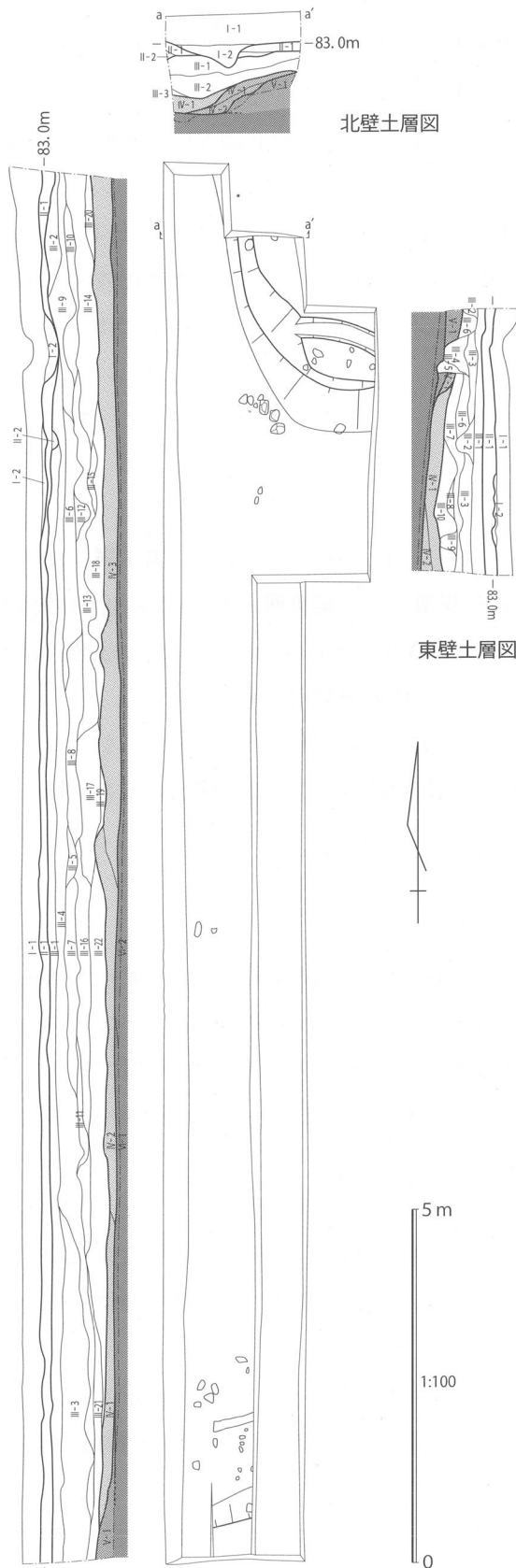
地表面から約1.0～1.2mの範囲で上位から第Ⅰ層（表土）、灰色細砂層を基調とする第Ⅱ層（旧耕土）、灰黄色細砂層を基調とする第Ⅲ層（遺物包含層 古墳時代後期～中世遺物を包含）がある。これより下位に黒色粘土層主体の第Ⅳ層（古墳周濠埋土層）、および黄色粘土層主体の第Ⅴ層（地山）があり、さらに下位に緑灰色シルト層主体の第Ⅵ層（地山）となる。

第Ⅰ調査区では第Ⅲ層まで除去したのちに周濠の検出状況を記録し、続いて周濠埋土（第Ⅳ層）の掘削をおこなった。

(2) 遺構

古墳周濠 第Ⅰ調査区は大部分が古墳周濠の範囲内で、調査区南端より北へ約0.5mの地点で周濠の南側肩を検出した。周濠底面（第Ⅵ層上面）はほぼ平坦であるが、調査区の中央部に向かって緩やかに下降していく。最深部は標高81.9m前後で、南側肩との比高差は約0.4m程度ある。

周濠埋土（第Ⅳ層）の掘削を進めていくと、調査区北端付近で他よりも大型の石を含む堆積層（第Ⅳ層）を検出し、さらに地山（第Ⅴ層）が次第に高くなっていく状況が認識できた。そこで、調査区を部分的に東側に拡張したところ、この地山の高まりの平面形がほぼ直角に屈曲する状況が確認できた。



西壁土層図

平面図

- 〔北壁〕
- I-1 表土
 - 2 2.5Y5/2暗灰黄色細砂 φ 5cm程度の礫含む 炭混じり
 - II-1 西壁II-1に対応
 - 2 西壁II-2に対応
 - III-1 西壁III-9に対応
 - 2 西壁III-14に対応
 - 3 西壁III-20に対応
 - IV-1 西壁IV-3に対応
 - IV-1 2.5Y4/1黄灰色細砂 φ 10cm程度の礫含む〔墳丘からの流土〕
 - 2 2.5Y5/2暗灰黄色細砂 ["]
 - V-1 2.5Y7/8黄色粘土
 - VI-1 10GY6/1緑灰色シルト
- 〔東壁〕
- I-1 表土
 - 2 2.5Y5/2暗灰黄色細砂 φ 5cm程度の礫含む 炭混じり
 - II-1 西壁II-1に対応
 - III-1 西壁III-9に対応
 - 2 5Y6/1灰色細砂
 - 3 10YR6/2灰黄褐色細砂 炭混じり
 - 4 10YR4/2灰黄褐色細砂 炭混じり
 - 5 5Y6/2灰オリーブ色シルト
 - 6 2.5Y5/1黄灰色細砂 φ 3cm程度の礫含む
 - 7 10YR3/3暗褐色細砂 φ 3cm程度の礫含む
 - 8 10YR4/3にぶい黄褐色細砂
 - 9 10YR6/2灰黄褐色細砂
 - 10 10YR4/2灰黄褐色細砂
 - IV-1 2.5Y3/2黒褐色シルト
 - 2 5Y2/1黒色粘土
 - IV-1 2.5Y4/1黄灰色細砂 φ 10cm程度の礫含む〔墳丘からの流土〕
 - V-1 2.5Y3/2黒褐色シルト
 - VI-1 10GY6/1緑灰色シルト
- 〔西壁〕
- I-1 表土
 - 2 2.5Y5/2暗灰黄色細砂
 - II-1 6Y6/1灰色細砂
 - 2 2.5Y5/2暗灰黄色細砂
 - III-1 10YR6/6明黄褐色細砂
 - 2 10YR5/4にぶい黄褐色細砂に
 - 10YR3/2黒褐色粘土ブロック混 炭混じり
 - 3 10YR5/2灰黄褐色中砂に
 - 10YR3/2黒褐色粘土ブロック混 φ 3cm程度の礫含む
 - 4 2.5Y7/2灰黄色細砂
 - 5 2.5Y5/2暗灰黄色細砂
 - 6 2.5Y6/2灰黄色細砂
 - 7 2.5Y7/2灰黄色シルト～細砂
 - 8 2.5Y7/3浅黄色細砂
 - 9 2.5Y6/4にぶい黄色細砂に
 - 6Y6/1灰色シルトまだらに混じる
 - 10 2.5Y4/2暗灰黄色細砂 φ 3cm程度の礫含む
 - 11 2.5Y5/2暗灰黄色細砂
 - 12 2.5Y6/2灰黄色細砂
 - 13 2.5Y5/1黄灰色細砂～中砂
 - 14 10YR4/2灰黄褐色細砂 φ 5cm程度の礫含む
 - 15 2.5Y5/3黄褐色細砂
 - 16 2.5Y6/3にぶい黄色細砂
 - 17 2.5Y6/2灰黄色細砂
 - 18 10YR5/2灰黄褐色細砂
 - 19 2.5Y5/2暗灰黄色シルト
 - 20 2.5Y3/1黒褐色細砂
 - 21 7.5GY5/1緑灰色シルト10YR5/3にぶい黄褐色細砂に
 - 22 10YR7/6明黄褐色粘土ブロック含む 炭混じり
 - IV-1 5Y2/2オリーブ黒色シルト
 - 2 10YR3/1黒褐色粘土
 - 3 5Y2/1黒色シルト
 - V-1 5Y8/3浅黄色粘土
 - VI-1 7.5GY5/1緑灰色シルト φ 5cm程度の礫含む
 - 2 5G6/1緑灰色シルト

第9図 第I調査区平面図・土層図

また、調査区北端を北側に拡張した結果、地山の高まりは直線的に延びていることが分かった。墳丘全体に対する調査区の位置から推定すると、検出した地山の高まりは後方部南西角の墳丘裾付近に相当するものと考えられる。この墳丘裾付近で検出した第Ⅳ'層は拳大の石を含んでおり、堆積状況からみて墳丘からの流土と判断した。ただし、含まれる石の量は後述する第Ⅱ調査区と比較して少量である。

調査区内で検出した後方部南西角の墳丘は南北約4m、東西約1.5m、周濠底からの比高差約0.5mである。墳丘は周濠底から標高82.5m付近までは急角度で立ち上がるが、それ以上は比較的平坦となっており、さらに東壁寄りでは墳丘上面に中世頃の改変に伴う小溝がある。耕地化に伴う削平による影響を受けているものとみられる。

2. 第Ⅱ調査区

(1) 層序

層序は基本的に第Ⅰ調査区と同様で、地表面から約1.0～1.2mの範囲で上位から**第Ⅰ層**（表土）、灰色細砂層を基調とする**第Ⅱ層**（旧耕土）、灰黄色細砂層を基調とする**第Ⅲ層**（遺物包含層 古墳時代後期～中世遺物を包含）がある。これより下位に黒色粘土層主体の**第Ⅳ層**（古墳周濠埋土層）、および黄色粘土層主体の**第Ⅴ層**（地山）があり、さらに下位に緑灰色シルト層主体の**第Ⅵ層**（地山）となる。

第Ⅰ調査区では第Ⅳ層上面で周濠の検出状況を記録したのち、周濠埋土の掘削をおこなった。第Ⅱ調査区では第Ⅲ層上面で土坑群と素掘溝を記録したのち、第Ⅳ層上面で周濠の検出状況を記録し、つづいて周濠埋土の掘削をおこなった。

(2) 遺構

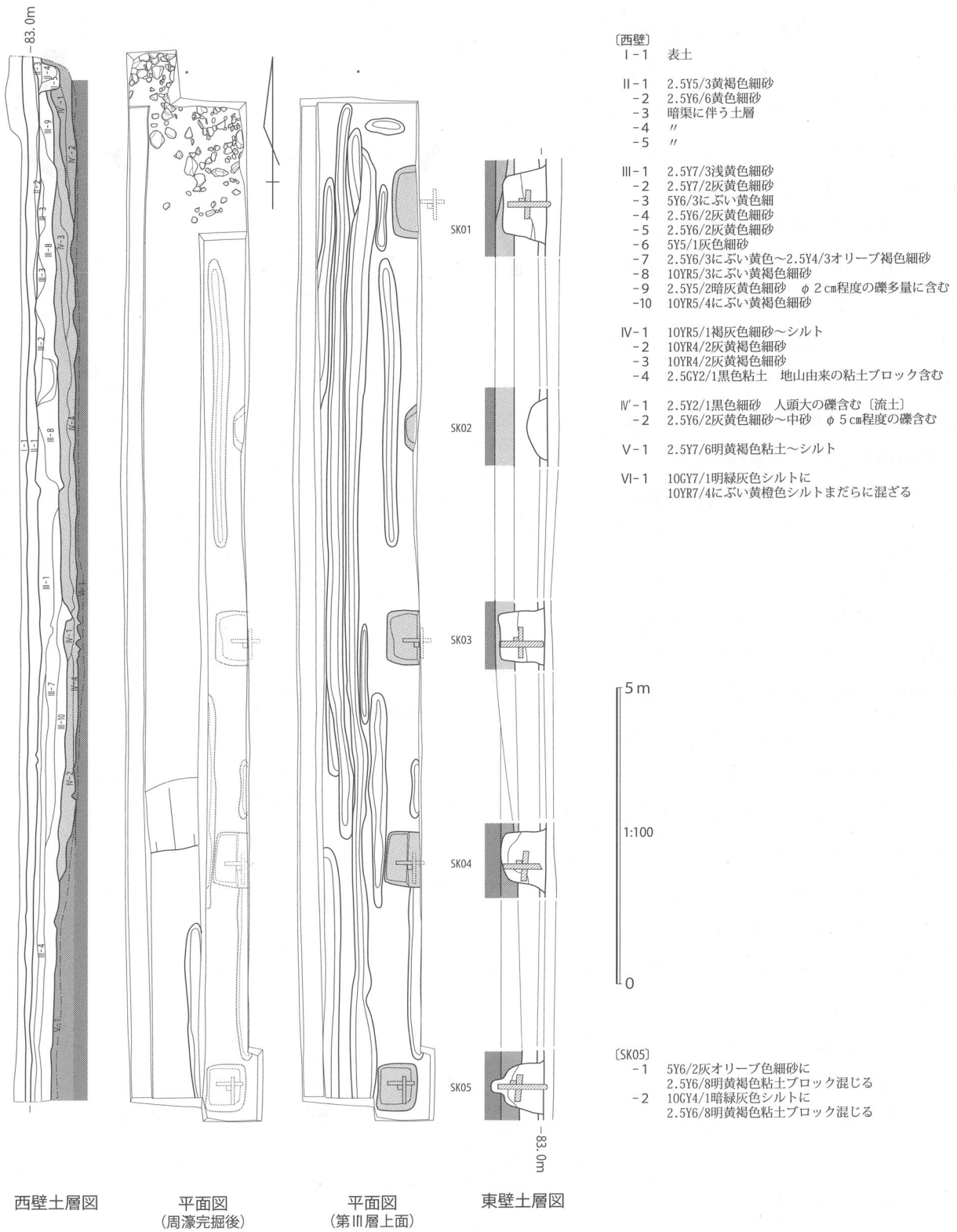
古墳周濠 第Ⅱ調査区も調査区の大部分が古墳周濠の範囲内で、調査区南端より北へ約4mの地点で周濠の南側肩を検出した。第Ⅰ調査区と同様に周濠底面は調査区の中央部に向かって緩やかに下降していく。周濠底面の最深部は標高82.2m前後で、南側肩との比高差は約0.4m程度である。周濠底の第Ⅴ層は調査区北端より6mの地点で土質が変化し、南側がシルト層主体、北側が中砂層主体であった。

調査区北端付近には拳～人頭大の石を多量に含むオリーブ黄色細砂層が堆積していた。現状の墳丘裾付近にのみ分布しており、墳丘からの転落石を含む流土堆積と考えられる。調査区北端を墳丘に向けて部分的に拡張したが、南側に比べて石の密度がより高くなるものの明瞭な墳丘裾は確認できなかった。本来の墳丘裾は調査区外にあるものと思われる。

素掘溝群 第Ⅱ調査区では第Ⅲ層上面で耕作に伴う素掘溝群の検出し、記録の作成をおこなった。第Ⅲ層上面の素掘溝群は南北方向のものが主体である。このほか、第Ⅲ層中の各面に素掘溝がみられ、第Ⅳ層および周濠埋土上面においても素掘溝が確認された。

土坑群 素掘溝群とともに第Ⅲ層上面で検出したが、遺構そのものは第Ⅱ層上面から掘り込まれた新しい時期のものである。土坑は5基検出したが、このうちSK01・SK03・SK04・SK05は一辺0.8～1.3m程度の方形の土坑で、深さは第Ⅱ層上面より0.7m程度を図る。

SK03、SK04、SK05は中心に木製の柱材が建てられていた。いずれも一辺10cm程度の断面方形の角材



第10図 第II調査区平面図・土層図

で長さ80cm程度が遺存している。また、この角材の北側、東側に断面4cm×9cm、長さ50cm程度の角材がそれぞれ横に添えられていた。柱材の安定を図るために添えたものと思われる、柱材とは鉄釘により結合されていた。SK01でも調査区東壁が崩れた際に同様の柱構造を持つことを確認しており、他の土坑より小さい土坑SK02についても同様の柱構造が調査区外に遺存しているものとみられる。配列からみてSK01～SK05は一連の施設を構成していた可能性が高い。

(石田大輔)

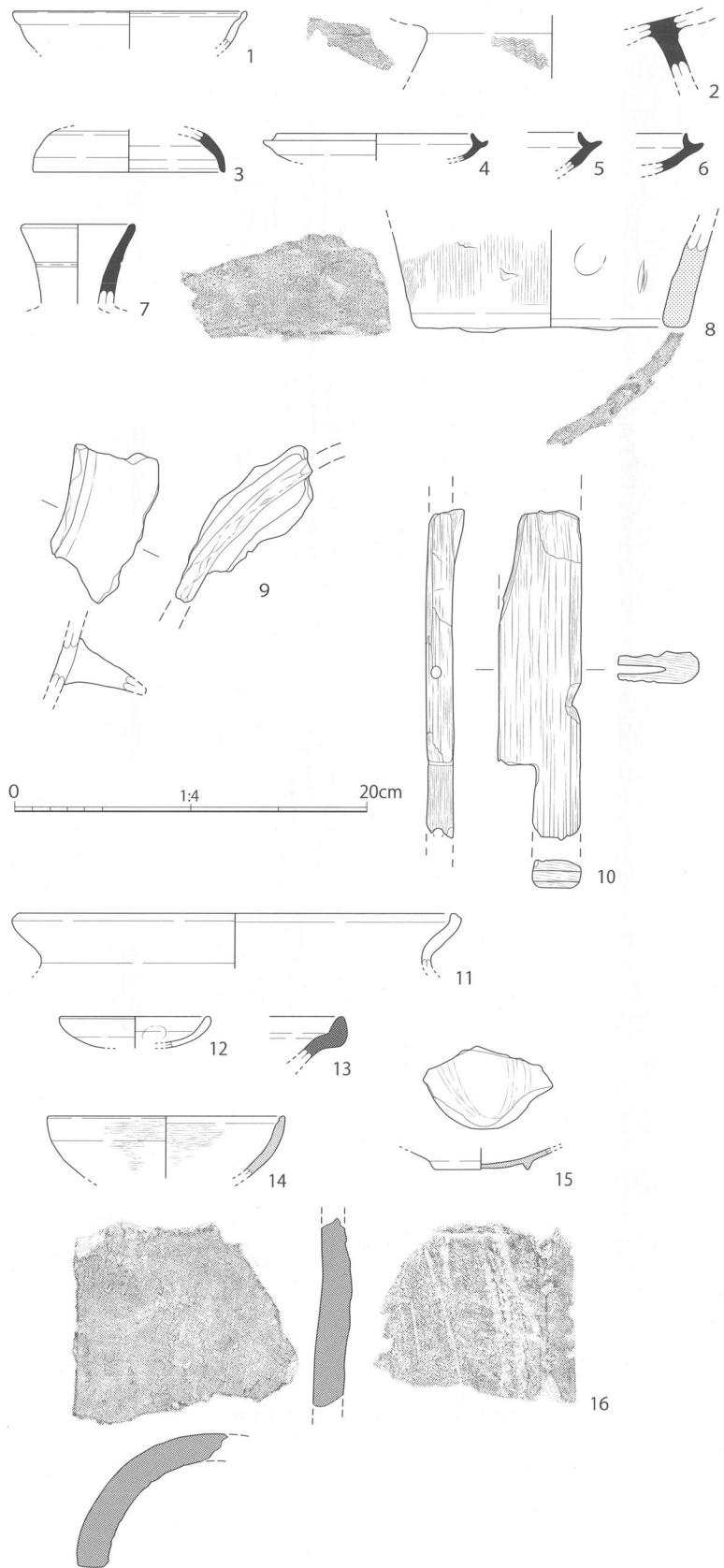
3. 出土遺物

今回の調査は出土遺物が少なく、大部分は周濠埋土のなかから古墳時代前期～中世の遺物が混在する状況で出土したものである。出土の遺物総数は標準的な遺物箱3箱程度である。

ここでは、図示した遺物を概観し、各遺物の色調、胎土、焼成、法量等については第7表にまとめた。

1は内湾口縁と口縁端の内面肥厚が特徴となる布留型甕の小片である。

2～7は須恵器の小片である。2は大型器台の脚部付近で、外面に波状文が施されている。3は杯蓋である。口縁端には明瞭な段があり、天井部と口縁部の間にはヨコナデにより稜を成す。4～6は杯身である。すべて口縁部の立ち上がりが短く、端部を丸く仕上げている。7は外反する口縁を呈しており、頸部中央付近には沈線が1条めぐる。小片であるため壺としたが平瓶の可能性も考



第11図 出土遺物実測図

えられる。こうした形状や特徴から概ね7世紀初頭頃に帰属すると考えられる。

8は器面の摩滅、剥落が著しい円筒埴輪底部の破片である。外面はタテハケ、内面にはナデが施されている。底部径が小さく、外反する形態などから古墳時代後期のものであることがわかる。

9は竈の鏝の部分である。鏝の部分と胴部の接合面で剥離しており、胴部をハケ調整で整形した後に、舌状の鏝を貼付したことが看取できる。なお、傾きについては想定した復元位置である。

10は長方形の板状木製品で用途は分からない。側辺のうち一方は直線的に延び、もう一方は屈曲している。小口側は両端とも折損している。側辺から径0.6cmの孔が穿たれている。

11は口縁端部が肥厚する大型の甕で、器壁が厚い。

12は土師質皿の小片である。口縁端部が厚い形態をなす。

13は須恵器鉢の小片である。口縁端部は大きく摘み上げられ、明瞭な面を呈する。口縁外端面は重ね焼きのために黒くなっていることが窺え、古墳時代の須恵器よりも胎土の粒子が粗い。東播系中世須恵器の特徴を示し14世紀頃に帰属するものと考えられる。

14・15は瓦器椀の小片である。14はヨコナデにより口縁部と体部の境がわずかに認められ、口縁内端面には沈線が施され段を呈する。摩滅が著しいが内外面共に横方向の暗文ヘラミガキが看取できる。15は底部の破片で、先端が丸く仕上げられた逆三角形の高台を有するが床面が底面に接する。摩滅が著しいが見込みに螺旋状の暗文ヘラミガキがわずかに残る。

16は丸瓦の破片である。外面はナデ調整で、内面にはわずかに板目や布目痕がある。奈良時代以降に帰属時期を求めることができる。

(今井和代)

第7表 出土遺物観察表

番号	器種	色調	胎土	焼成	口径/底形 (cm)	器高 (cm)	残存率	出土地点	備考
1	甕	2.5Y7/2灰黄	密	良好	13.2	2.1	口縁部1/8	I trB区周濠埋土	
2	須恵器器台	10Y5/1灰	密	良好	-	3.6	脚柱部1/8	II trA区周濠埋土	
3	須恵器杯蓋	N7/灰白	密	良好	10.8	2.4	口縁部1/8	I trB区周濠埋土	
4	須恵器杯身	N5/灰	密	良好	10.8	1.5	口縁部1/8	I trC区周濠埋土 下半	
5	須恵器杯身	N6/灰	密	良好	-	-	破片	I trD区周濠埋土	
6	須恵器杯身	7.5Y6/1灰	密	良好	-	-	破片	I trD区周濠埋土	
7	須恵器壺	6N/灰	密	良好	6.0	4.5	口縁部1/8	I trC区周濠埋土	平瓶の可能性有り
8	円筒埴輪	10YR7/3にぶい黄橙	密	良好	15.4	5.6	基底部1/4	II trA区周濠埋土	
9	竈形土器	10YR6/4にぶい黄橙	密	やや軟	-	-	破片	II trB区周濠埋土	
10	不明木製品	-	-	-	最大長 :18.6	最大幅 :4.6	最大厚:1.8	I trB区周濠埋土	
11	甕	2.5Y6/3にぶい黄	やや粗	良好	24.4	3.1	口縁部1/8	I trA拡張区 I～III層	
12	土師質皿	7.5YR6/4にぶい橙	密	良好	8.6	1.7	1/4	I trB区III層下半	
13	須恵器鉢	5Y6/1灰	密	良好	-	-	破片	I trB区 サブトレ	東播系中世須恵器
14	瓦器椀	7.5Y4/1灰	密	良好	13.2	3.5	口縁部1/8	I trA拡張区 I～III層	
15	瓦器椀	N4/灰、5Y8/1灰白	密	良好	5.2	1.2	底部1/3	I trA拡張区 I～III層	
16	丸瓦	I trD区周濠埋土直上	密	良好	-	-	破片	I trD区周濠埋土 直上	

V. まとめ

墳 丘 従来ノムギ古墳の墳丘は、平成15年度第2次調査の成果から、後方部の東辺が長さ41.5m、南辺が長さ40mに復元されていた（近江2006）。今回の第4次調査では、第I調査区で後方部の墳丘裾が直角に屈曲する箇所を検出し、これを後方部南西角と認定した。このことにより、後方部の形状をより具体的に復元する手掛かりが得られた。第2次調査で確認された後方部南東角から今回の第4次調査で検出した後方部南西角までの直線距離は約37.5mとなり、後方部南辺の長さが従前の復元案より若干小さくなる。

現状の墳丘を観察すると後方部の平面形は西に向かって次第に幅が狭まる特異な形状を呈しているが、これは後世の改変によるものであり本来は整った方形を呈していた可能性が高くなった。また、第I調査区の拡張部分でも後方部と前方部のくびれ部は検出されなかった。くびれ部付近の現状の墳丘裾は本来の位置からほとんど後退していないものと思われる。

なお、第1調査区内で確認された後方部南西角は地山削り出しにより形成されていた。

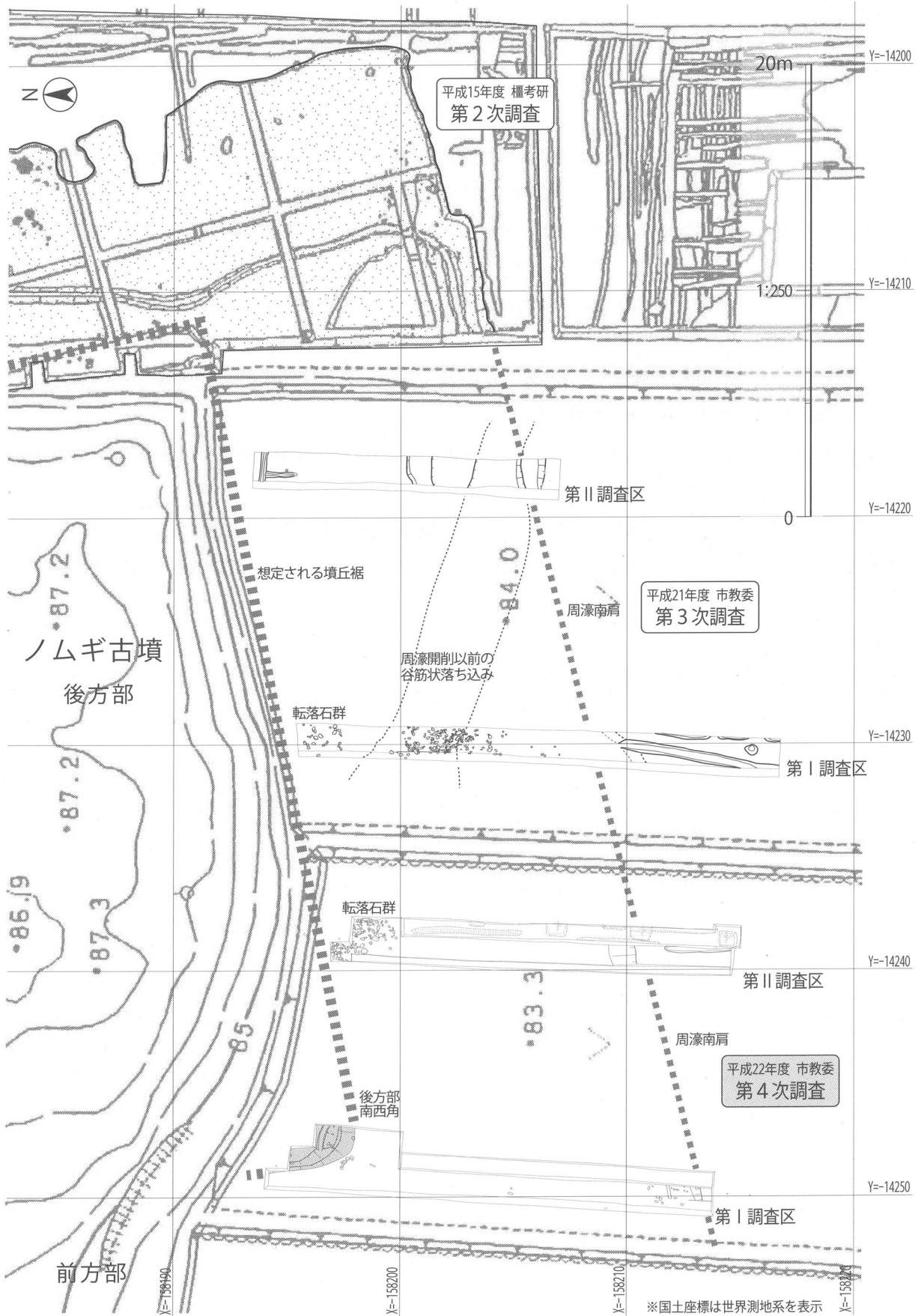
葺 石 今回の第4次調査では、第II調査区北端において墳丘からの転落石を含む流土堆積と考えられる土層を検出した。平成21年度第3次調査でも第I調査区北端で墳丘からの転落石とみられる石群が検出され、墳丘裾に葺石が存在した可能性が指摘されていたが（青木・今井2011）、今回の調査成果によりその蓋然性がより高くなったといえよう。ただ、第3次調査第II調査区や第4次調査第I調査区では検出された石の量が少なく、上記のような想定には問題を残す。第2次調査の際にも周濠内から石がほとんど出土していないため、葺石の存在については否定的な見解が示されている（近江2006）。墳丘上の調査が十分におこなわれていない現状では、葺石の有無については判断を保留しておきたい。

周 濠 第2次調査で検出された周濠外縁、および第3次調査・第4次調査における各調査区で検出された周濠南肩はほぼ直線的に並ぶ。このことから、後方部墳丘南側の周濠は墳丘東側における検出状況と同様に、若干の肩部の凹凸はあるもののほぼ直線的な形状を呈していると推定される。復元される周濠は第3次調査地では幅12m程度、第4次調査地では13～14m程度であり、西に向かって次第に周濠の幅が広がる様子が窺える。

なお、今回の第4次調査で周濠内から出土した遺物は少量で、その内容にはかなりの時期幅がみられた。第2次調査の成果によりノムギ古墳の築造時期は古墳時代前期初頭に遡る可能性が高まっているが（近江2006）、今後の調査により確実な検討材料が増加することが期待される。

土 坑 群 今回検出した柱材を伴う土坑SK01～SK05は土層の状況から新しい時期の遺構とみられる。地権者（萱生町在住の高齢男性）の証言によると、今回の調査地には戦時中に旧帝国海軍の大和航空隊が建設した飛行場（通称「柳本飛行場」）に関連する「倉庫か便所」のようなものがあつたという。佐保庄町一帯には飛行場の兵舎区があつたとされており（高野2003）、先述の地権者による証言もこれに合致している。今回検出した土坑群はこうした海軍関係の施設に伴うものとして理解することができると思われる。昭和22(1947)年に米軍が撮影した航空写真には、この地権者の証言を裏付けるようにノムギ古墳の墳丘南側に数棟の建物群が認められる。しかし、今回検出した土坑群の位置と米軍撮影の航空写真に見える建物とは位置が若干異なるようである。建物そのものではなく付随する柵などの構造物に伴う遺構である可能性を考えたい。

（石田大輔）



第12図 墳丘南側の調査成果

第2章 個人住宅建設に伴う調査・範囲確認調査の概要

[参考文献]

- 青木勘時・今井和代2011「ノムギ古墳（第3次）」『天理市文化財調査年報』平成21年度 天理市教育委員会
卜部行弘ほか2008『下池山古墳の研究』奈良県立橿原考古学研究所研究成果第9冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 河上邦彦ほか1996『中山大塚古墳』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第82冊 奈良県立橿原考古学研究所
福尾正彦1989「衾田陵の墳丘調査」『書陵部紀要』第42号 宮内庁書陵部
- 泉武・松本洋明・青木勘時2000『西殿塚古墳 東殿塚古墳』天理市埋蔵文化財調査報告第7集 天理市教育委員会
- 青木勘時2007『波多子塚古墳-後方部北側の調査成果-』天理市埋蔵文化財調査報告第8集 天理市教育委員会
- 伊藤勇輔1981「ノムギ古墳」『磯城・磐余地域の前方後円墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第42冊 奈良県立橿原考古学研究所編 奈良県教育委員会
- 岡林孝作1997「大和古墳群（ノムギ古墳隣接地）発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』1996年度（第1分冊）
奈良県立橿原考古学研究所
- 近江俊秀2006『ノムギ古墳』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第93冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 高野眞幸（編）2003『幻の天理「御座所」と柳本飛行場』奈良県での朝鮮人強制連行等に関わる資料を発掘する会

[挿図出典]

- 第8図・第12図 近江2006 付図を一部改変して引用

付論 ノムギ古墳前方部南側隣接地における物理探査

I. はじめに

本報告は、大和古墳群基礎調査に伴って、天理市教育委員会の委託を受け、ノムギ古墳前方部墳丘の南側隣接地において実施した物理探査の概要と成果について、報告をおこなうものである。

II. 物理探査の目的と方法

今回の物理探査の目的は、ノムギ古墳に関する既往の調査成果を受けて、前方部墳丘南側隣接地において、周濠と墳丘裾の位置と様相を推定し、計画されている範囲確認の発掘調査のための参考データとし、ノムギ古墳の学術的な意義を評価するための基礎資料を提供することであった。

物理探査とそのデータ解析は、下記のとおり実施した。現地調査に際しては、天理大学考古学・民俗学専攻・専門教育科目「文化財探査」の受講生の助力を得た。

調査場所	ノムギ古墳前方部墳丘南側隣接地（天理市佐保庄町）
調査員	桑原久男（山の辺遺跡調査会・天理大学文学部）、小田木治太郎（天理大学文学部）
調査指導	岸田徹（同志社大学文化情報学部）
調査補助員	飯塚健太、奥本英里、大原久典、中野裕太 （以上、天理大学歴史文化学科考古学・民俗学専攻学生）
事前準備	平成23（2011）年1月5日
現地調査	平成23（2011）年1月6日
データ解析	平成23（2011）年1月7日
探査方法	地中レーダ（GPR：ground penetrating rader）探査、電気探査

III. 地中レーダ探査の結果と所見

今回の調査地は墳丘前方部南側に隣接する耕作地であるが、休閑期であったため、障害物もみられず、レーダ探査をおこなうには好適であった。また、寒さが厳しく、調査前日に少量の降雨がみられたものの、地表面の状態は問題なく、悪条件ではなかったと言える（第13図）。

調査に際しては、調査地の四隅に杭を打ち、東西方向をX軸（0-24m）、南北方向をY軸（0-40m）とする調査区を設定した（第14図）。調査範囲は、約960㎡である。

地中レーダ探査は、1月6日、東西50cm間隔の測線上を南北方向に走査した。使用した機器は、コントロールマシンとして米国G. S. S. I社製SIR-3000、アンテナは200MHz、400MHzのものを使用した。データの解析には、Dean Goodman氏作成の解析ソフトウェア「GPR-SLICE ver. 7」を使用した。ここでは、400MHzのアンテナを用いた地中レーダ探査による所見を示しておきたい。

レーダ探査の断面図では、前方部側の反射が比較的弱い傾向が認められるものの、周濠の明確な立ち上がりを読取することは困難である。タイムスライスでは、3次元でデータ化を平滑することによりノイズが低減され、以下のような所見を得ることができた。

①地表近くのノイズ

地表に近い0-7ns（約0~21cm）のデータ（註）は、アンテナの走査によるノイズが多く認められる。

②南北方向の筋状の異常応答

6-12ns (約18~36cm)、11-18ns (約33~54cm) のデータには、南北方向の直線上の異常応答が5m程度の間隔で認められ、地下に埋設された管状の何かを捉えている可能性があると考えられる。この直線状の異常応答の一部は、17-24ns (約51~72cm) のレベルまで現れている。

③深さ30~70cm前後に見られる異常応答

11-18ns (約33~54cm)、17-24ns (約51~72cm) のタイムスライスでは、X=0m、Y=25mの地点から、X=24m、Y=43mの地点まで、ゆるく湾曲するようなラインの異常応答の広がり認められ、周濠の立ち上がりと考えられる異常を捉えている可能性があると考えられる。推定される周濠の復元線を第16図に示しておきたい。

IV. 電気探査の結果と所見

電気探査は、応用地質株式会社製のHANDY-ARMおよびSCANNER-32を使用して、比抵抗法による高密度電気探査をおこなった。電極配列はウェンナー法を採用し、電極間隔は1~5mまで1mずつ間隔を広げて測定をおこなった。データの解析は応用地質社製のElecImager/2DLiteを使用し、有限要素法による逆解析処理を行い、地下の比抵抗分布を求めた。

第15図に、X=10mライン、X=18mラインの測線における断面図を示したが、X=10mラインではY=17~29m、X=18mラインではY=15~27m、つまり墳丘から約10mの範囲で低比抵抗値を示している。一般に濠や水路は埋没した後もまわりの土壌に比べて水分を多く保っていることが多く、同様の低比抵抗部は他の測線でも確認されていることから、この領域がかつての周濠の部分であると認めることができる。

V. まとめ

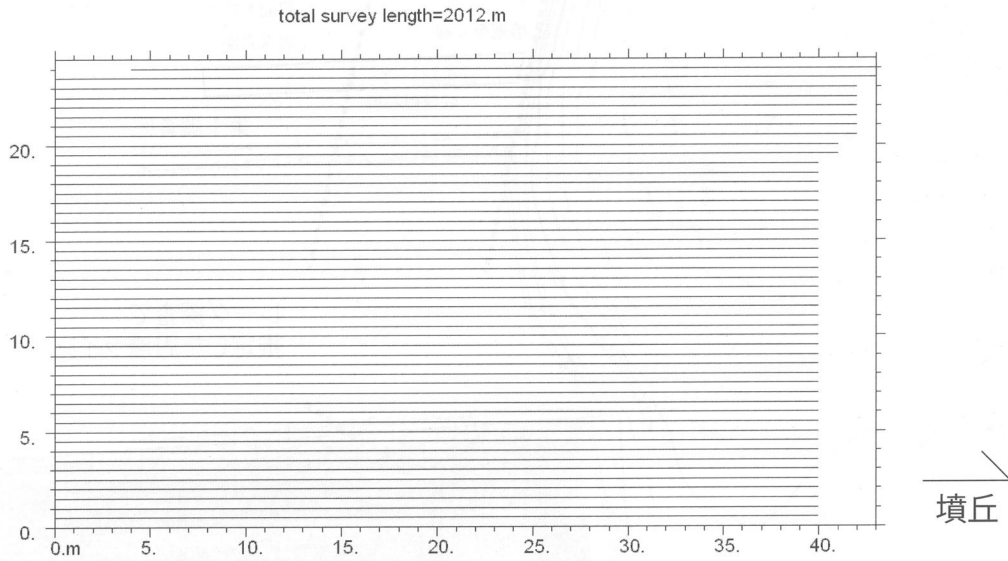
以上、地中レーダ探査と電気探査の結果は概ね、調和的であると認められる。昨年度の調査と同様、物理探査と発掘調査の成果を照合することで、古墳に関わる多角的な情報を得ることが可能となった。

(桑原久男・小田木治太郎・岸田徹)

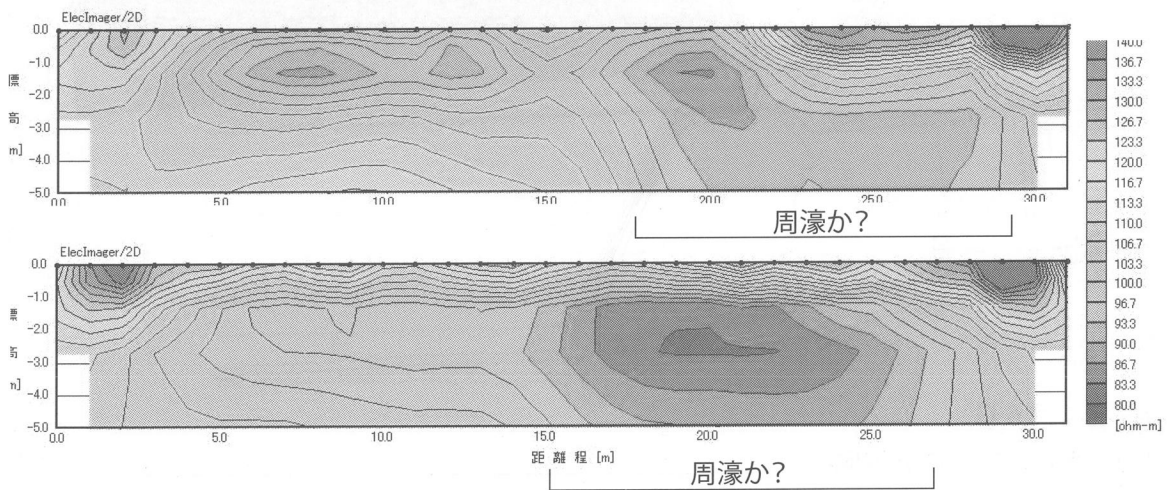
[註] タイムスライス図の推定深度は、地中での電磁波速度を0.06m/nsと見積もった場合の深度であり、実際の深度とは若干異なることが考えられる。



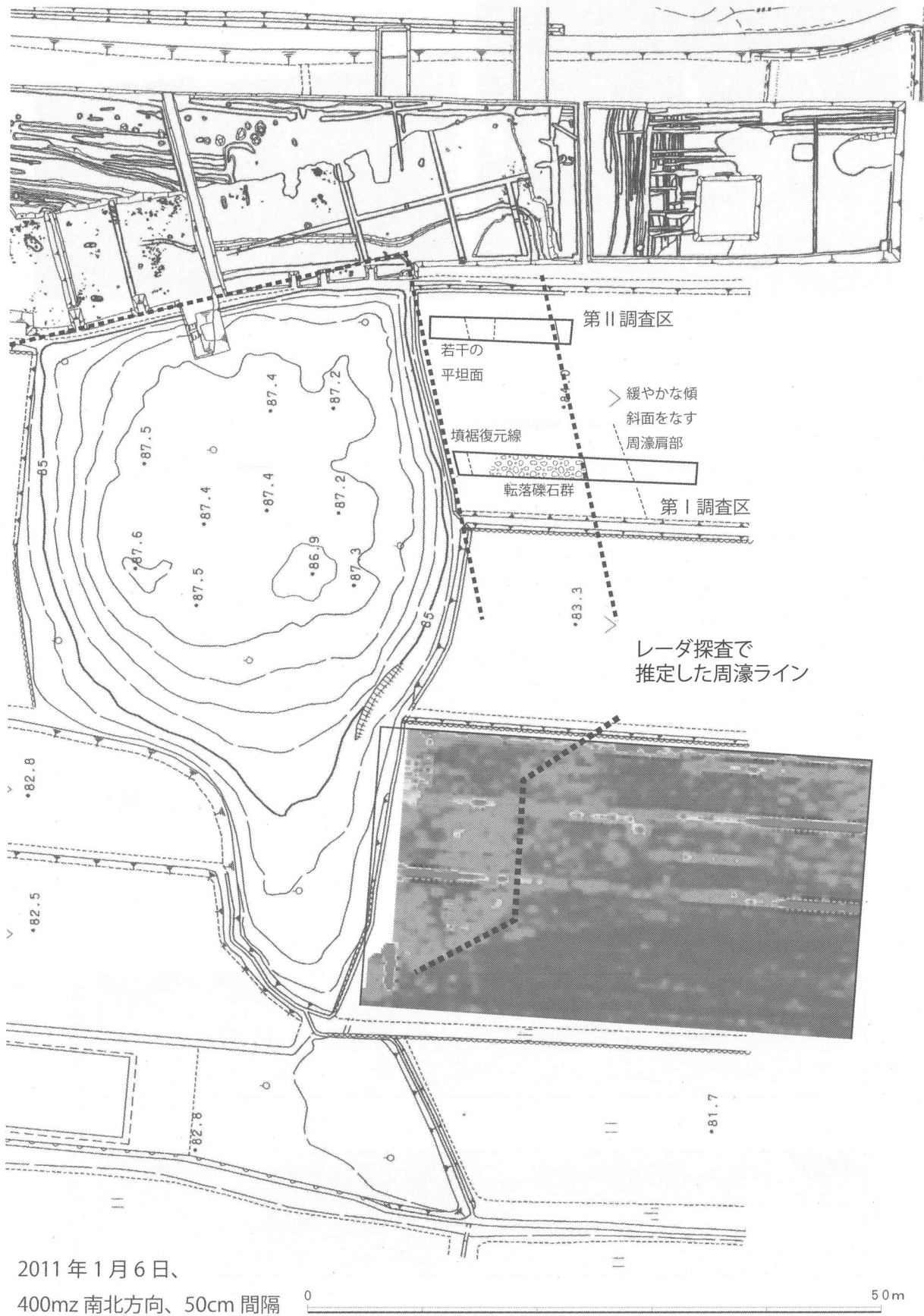
第13図 地中レーダ探査・電気探査作業風景（1月6日）



第14図 地中レーダ探査の測線（縦軸がX、横軸がY）



第15図 電気探査の断面の例（上：X=10mライン、下：Y=18mライン）



2011年1月6日、
400mz 南北方向、50cm 間隔



第16図 レーダ探査 (GPR) によるタイムスライス (11-18ns)

版 圖



調査地遠景(北から)

左：ヒエ塚古墳 右：ノムギ古墳



調査地遠景(西から)

奥：ヒエ塚古墳 手前：ノムギ古墳

図版2 成願寺遺跡 (第18次) ②



調査区全景(北から)



調査前全景(北から)



素掘溝群検出状況
(北東から)



素掘溝群完掘状況
(北東から)



SX11・SK12完掘状況
(北東から)

図版4 成願寺遺跡 (第18次) ④



SX13検出状況
(南東から)



SX13完掘状況
(南東から)



SX13土層状況
(北西から)



調査地遠景(南西から)

左:ノムギ古墳 右:ヒエ塚古墳



調査地遠景(南東から)

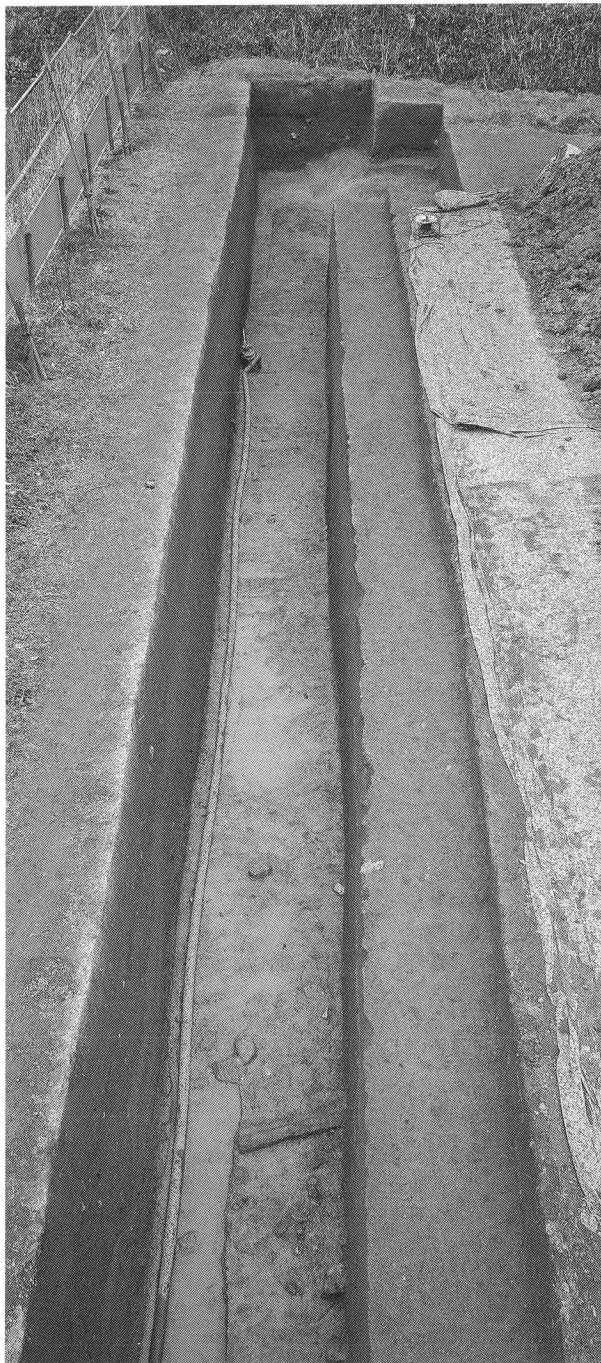
左:ノムギ古墳 右:ヒエ塚古墳



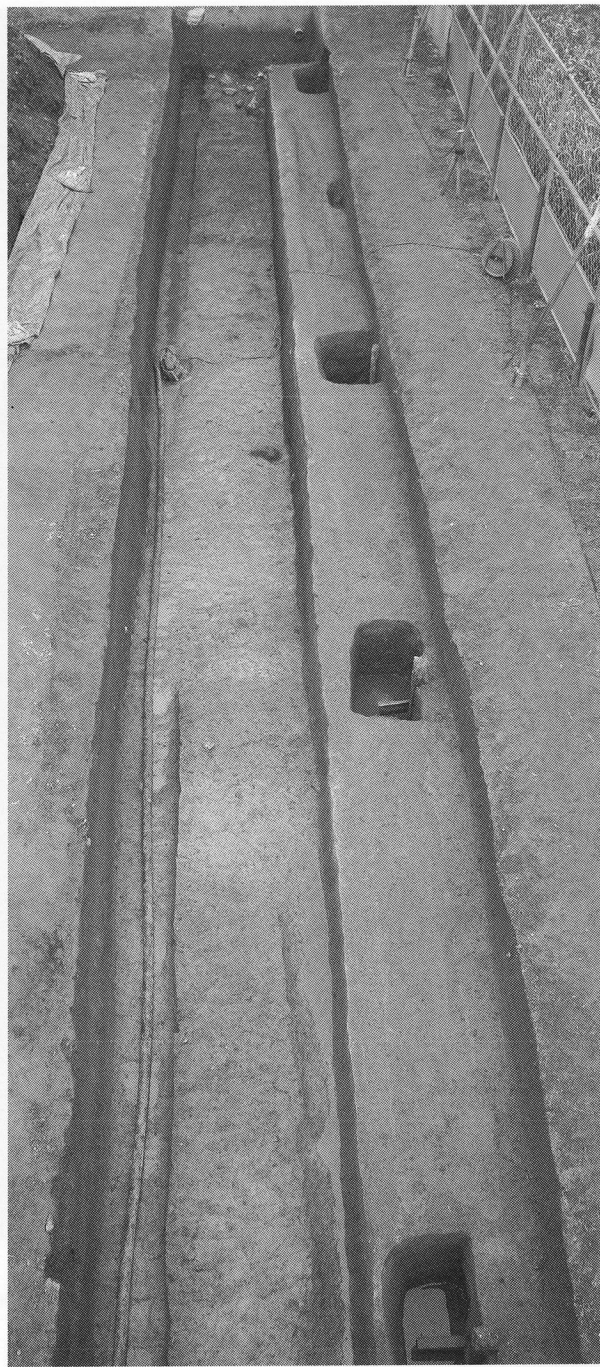
調査地遠景(南から)



調査地全景(垂直)



第Ⅰ調査区全景(南から)



第Ⅱ調査区全景(南から)

図版8 ノムギ古墳(第4次) ④



第1調査区
周濠上面検出状況
(南から)



第1調査区
周濠南肩(北東から)



第1調査区
後方部墳丘裾検出状況
(南西から)



第1調査区
後方部墳丘裾検出状況
(南西から)



第1調査区
後方部墳丘裾断割状況
(南西から)

図版10 ノムギ古墳(第4次) ⑥



第II調査区
周濠上面検出状況
(南から)



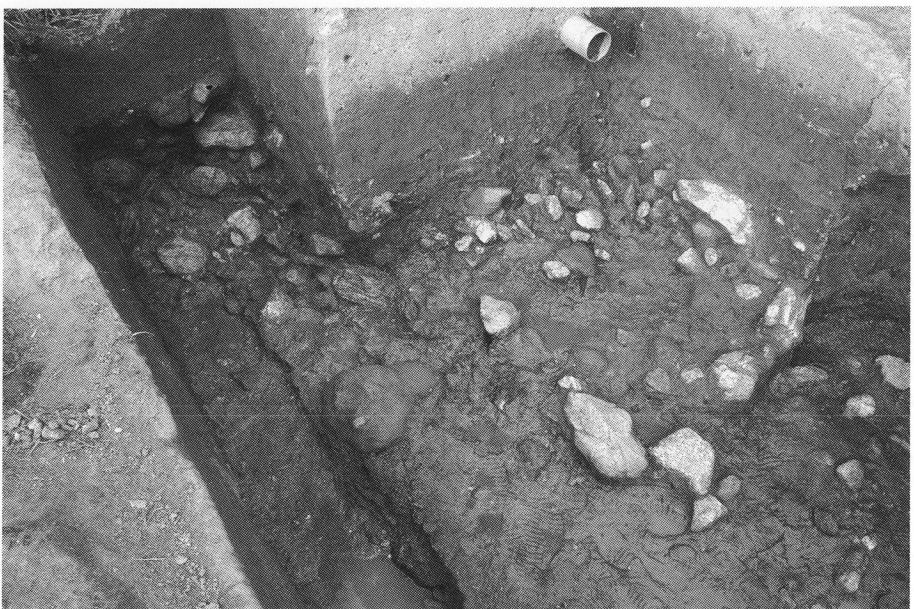
第II調査区
周濠南肩
(南西から)



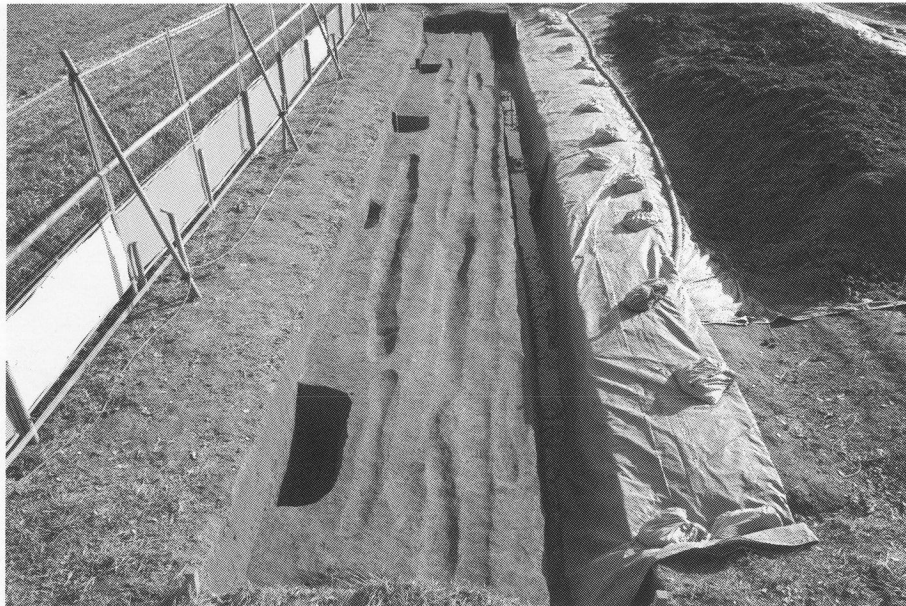
第II調査区
土層堆積状況
(南東から)



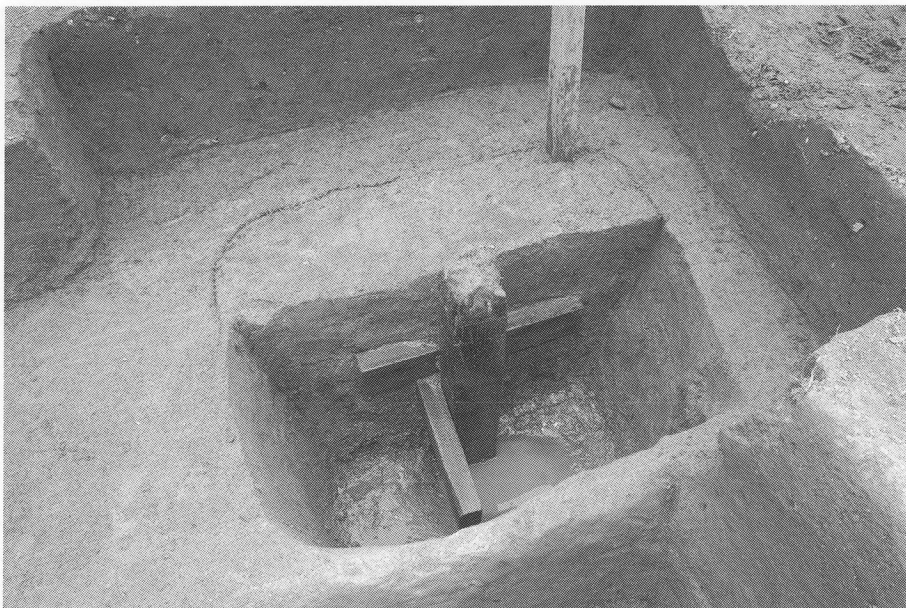
第II調査区
石群検出状況(1)
(南東から)



第II調査区
石群検出状況(2)
(南西から)



第II調査区
素掘溝群掘削状況
(北から)



第II調査区
SK05



第II調査区
SK05断ち割り



ビニールハウス撤去作業



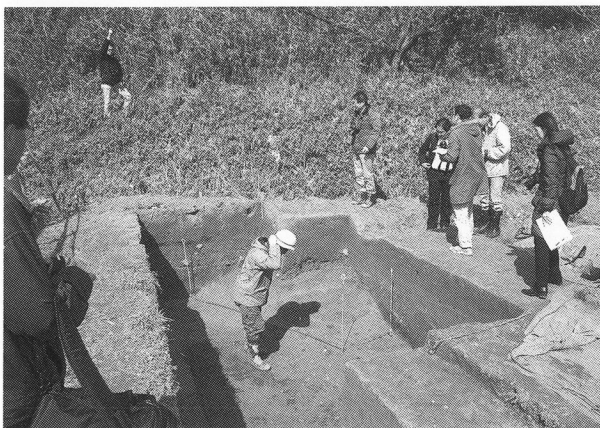
調査前状況



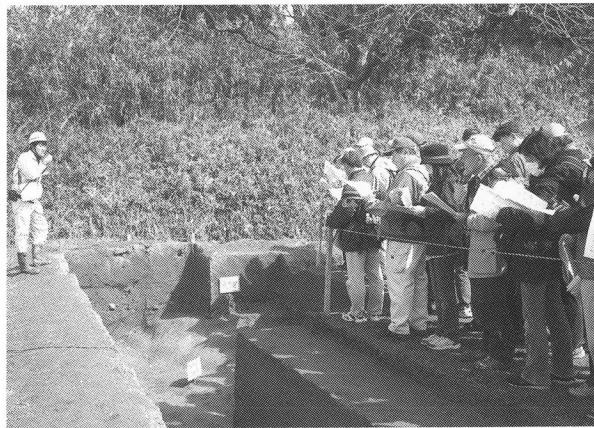
掘削作業



精査作業



報道発表



現地説明会



埋め戻し作業



埋め戻し完了

報告書抄録

ふりがな	てんりしぶんかざいちょうさねんぽう へいせいにじゅうにねんど							
書名	天理市文化財調査年報 平成22年度							
副書名	成願寺遺跡 (第18次) ノムギ古墳 (第4次)							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	石田大輔 (編集)・今井和代・桑原久男・小田木治太郎・岸田徹							
編集機関	天理市教育委員会							
所在地	〒632-8555 天理市川原城町605							
発行年月日	平成24 (2012) 年 3月30日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
成願寺遺跡 第18次	天理市佐保庄町 539-1	292044	11B-0266	34° 34' 29"	135° 50' 40"	20101203-	40㎡	個人住宅建設
			※1	※2	※2	20101215		
ノムギ古墳 第4次	天理市佐保庄町 443	292044	11B-0144	34° 34' 26"	135° 50' 40"	20110214-	78㎡	範囲確認調査
			※1	※2	※2	20110318		

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
成願寺遺跡 第18次	集落跡	古墳	溝状遺構	須恵器・土師器など	
ノムギ古墳 第4次	古墳	古墳	周濠	土師器・須恵器・瓦など	古墳周濠を確認 後方部墳丘南西角を確認

※1 遺跡番号は奈良県遺跡地図収録の番号を掲載した。

※2 経緯度表示は世界測地系 (平成14年4月1日より適用) による。

平成24 (2012) 年 3月30日

天理市文化財調査年報 平成22年度

発行 天理市教育委員会
編集 天理市川原城町605番地

印刷 東洋印刷株式会社
奈良県桜井市三輪371